六歌一冊

宇治巻　七

哥を名とせり

Murasaki Shikibu [v.51]
[Kyoto, 1654]

PL788
.4
.G4
1654
vol.51
Copy 1
Asian
Japan
Legl

LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

葉廿四文の表のるゝ
家なるをれ[illegible]のありしゆゑべを[白ん]笑[浮ノ字]ひすゝ
世なしことくしたさほどまはあるまじげなりしほ
人がらのまめやかなおかしうもありしかれと
いぶなるれこゝろまはくちなしくてやうしこと
とねたうおぼさるゝまゝに[中]女君をもうたゝるさ
こゝゆへおれがちまかるすぢのまれまくこし給
かり[中ん]志たずる心うしとたづしめうらこゝろし給
ありくはいとくるしうてありのまゝにや写して
ましとおぼをど[葉ノ浮を]やむごとなきさ後ハ[illegible]
給いざなれどおきたゝなるぬかゝるこゝろとゞめて
人のかくしをさまへる人を[illegible]いひさがなく写し

出たんまも。さて白ノすぐしぬべきれ心ざ海に
もあらざめり。さふら海人の中にも。たらなうまれ
をもの給ふれんと。おぼしたちぬるかざりも。あら
まじき里までも。弱させぬふれさ海ようらぬ中ど
なるに。さづり月日をへて。荒しきむめるあたりは。
ましてなるぞこぐらしきとたり出給てん。何か
よりつるへき給たんはいかじもをん。いづる白と葦とのなり ざ海
まもいとおしくこそはありとも。ふきぐべき 白ノ好き
人のれころざ海なるものは。よその人 浮と白にあはせたるはとこ よりもそこ
にくなどづりぞおぼゆべき。とてもうくてもワが
をこたりまてはまてそこなるじとせ久し給つ。

いとおしながらもさてしいで給いぞことざ海ま
つきぐさしくはえいひなし給ひ〇ばとしこめて物
思んじさしろ。よれつ〇の人になりてぞおもし
けり。荒ん人は毎さしへなくのどかにおぼしなさ
ぢ。浮ノ絹ど紙なりとさつらんと。こころぐるしうのミ
さやまのひながら。所をさミの程をさるべきついで
なくて。かやすくかよひのべきこちなし〇ぞ。神乃
いさむかよりもいりなし。されど今いとよくかて
なさんとす。山里のなぐさめと。さをさてし心ある紙。
すうし宮ばかぎもへぬべきことどもつくりて出て。のど
やかなりてもこん。さてさぞしは人のさるまじき

すこどころしてやりくさりかゝるにはれ(ほうす)ころをも
のどめをさ我こゝあるもひとれもどきあるまじく
なれめまてこそよろしめ。ゆゑ何べぞいつより
なぐさくとがめられんも抱さはがしく。たゞめれ
心にこゝぶべし。又(白)宴のれ(中)かゝのきゝあげさんことも。
もとのところをさはくしうねてもなれ。芳を
ますれがかなんも。いとほいなしなぐ。恐ししげ
むかも。例(地)のいとのどけさすぎこゝろ心からなるべし。
(三条宴之)いろすべき所あげしまうけて。遊びてぞつくらせ
給けり。すさ(荒ん)しいと夜なきやうにもなり給にこれど。
(白)宴のれ(中)かゝには。我こゝゆゑなく心にをつうまつり

給ことおもひやうなり。こゝてまつる人もあやし
きまでしんど。世中（中ん）をやうく見しなり。人の宿禰
をうきて給まゐる。これこそは面ことる書をつすれ恐
心なりされ。なぞりさへあさかゝぬこゝろしなれと。哀
もすくなりしず。わ（葉ノ）びまさり給まくり。人がらも
世の見しも。さ面ことるもれしゆへだ。家（匂）の此心を
あまりこれもしげなき時ぐい。おもたずなりけり
すくをば。こ姫（大）君のおぼしをさてしまくにもあら
で。かく抱しきしうるべきこゝろしもかりそめけん
よと。おぼすおりくおぼくなん。されどこ（葉と）いめんし
給ことはいかし。年月もあまりむかしをへぐて

ゆきうちくの山心をふうしらぬ人も、すゞ後く
しきこゝ人こそさゞらのゆり君こゝかむつび
とも志ぬにつきぐしなれ、中々うゝぎりあり
ほどに、例てうぐひこゝありさ夜もいくまし
なれど、白宮のこゝぞおぼしうるがひこゝをいよく
くらしうおぼしたゞり給つゝをのづからうとき
さ夜になりけとさりとてもこゝぞおなじこゝろの
うちり給ものなりなり、白やもあぐなるれ中ぶこそ
こまうきふしもまじれ、けり君のいとうけくしう
おしすけ給まくに、白ん ほかにはかゝる人も出くまじき
にやとやむごとなきものにおぼしてうちとけ

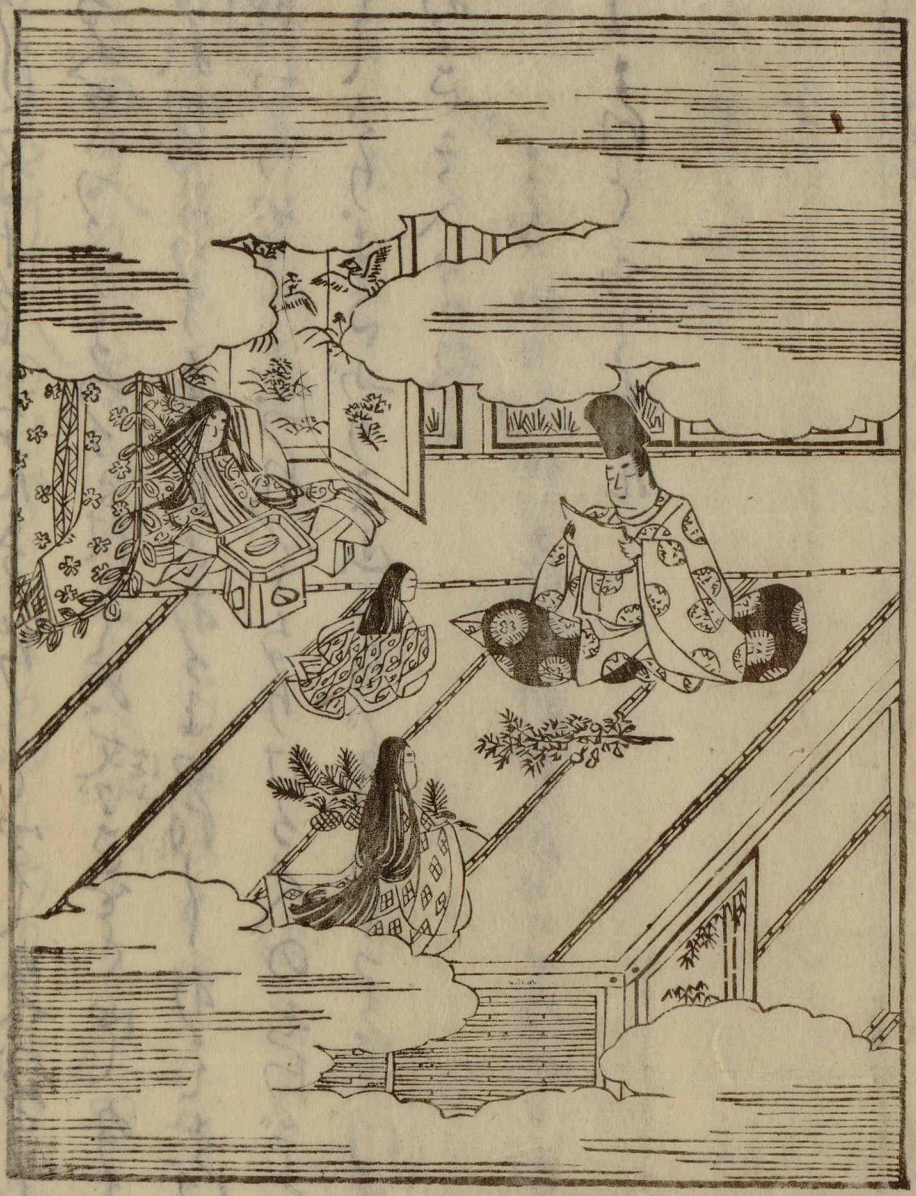
なつしきるには、人（中と）ままさりてもてなしぬへぞ
あさし（中ん）よりはすこし物せひしげまりてすぐし給。
正月（白中へ）の一日すぎたる比ひたりなて、ひる君のとし夜
たりなへ家をもてあそびうけくしミ給ひたる
ふ。ちいささひしは、みどりのうすやうなる所にミ
文のおほきやかなるまちいささひげこを小松ゆ
つけたる。又すくしもきこそぶこちりそへて、あふ
なくもしつ里ある。女（中）君ゆこそまつれば、こやそれも（白詞）
いづくよりぞとのなふ。宇治（ひしく詞）よりこいふ（大輔中ノムシん女）のおとぐま
とて、もてひづらひ侍つる紙、れいのれ前（おまへ）にてぞ
ゆらんぜんとて、とり侍ぬるといふも、いとあまたて

しきかしきまて、これ[鈴]こそ[illegible]をつくりて、色どり
ころこなりかり、松もいとようまてつくまとろえる
ぞとよく思えていひつゞくれば、[白]こやもいひのて、
いで[詞]われもまてこやしてんとめすは、[仲ん]如君いと
うるはしくおぼして、文は多いふがりやれとの
給はかゆのあるこれば、[白ん]こや[荒]大ねのさりげなく
しなしたる文まや、うぢのなぞりもつきぐしと
おぼしよりて、これ[illegible]をとり給ひ、さすがまそれ
なるんときまとおぼすま、いとまばゆかれば、[詞]何けて
こんよ思ひじやしき給はんとすると、のるまへば、[仲詞]こ
ぐるしうなるはその女どちの中まかきかなり

さんうちとけぶことがれらんぞんとの給がさは
がぬ氣色なれば（句詞）さはこんな女のふこがさは、いかゞあ
ふとてあけぬへれば、いとワやかなりてまて、
（浮ノ文詞）おぼつかなくてとしもくれ侍まけり、山里のいぶを
ふこそ、峯のうすこもさら雨なくてとて、ちしまゝ
これワ君のおまへまおやきうし侍めれどゞうさ
なり、ことまらしくきさふしもこしほど、おぼしか
ゝ紙れめさてゝこれさてぶゝ紙こゝまへぞげり
女のまゝて、（文ノ詞）手あらさまりて、何ぞすかさふらぬれ
ワさくしまもいかまされもしきれよろこびおぼく
侍らん、こゝまはいとめでさきれすまねのこゝろふか

さ候。なる候ふきたしうらぎこなり。うくてのこつく
づくとなりめさせ給ふりハ。とさぐくもけうりまい
らせなて。此心もなぐさめさせなへと云給ふり。
つましくおそろしき抱まおぼしこりてなん。其
うきことなるげを給めり。けう君の此まへにとて。
卯づち来たを給。お目(白と云)きおまへの此ふんぎざふん
ほぐに。此ふんぎさせなへとなん。こ夜ぐと。こと
いこもえしあへず。抱なげしげなるさ夜ぎ。うくく
なしげなるもうち色しく。おやきと此ふんぎて。
今(旧)ハのなへかしこうぞとのなへハ。ぞ(中詞)しうれやま
ぎとまさけるへのむすめ。さるやうありて。けごろ

りしこゝはあるとなんきく侍しと宣しぬへバ白ん
なべてつゝうまつるとはえしぬ文がさをとゝ心しぬる
かれはづらはしきとさあるはおぼ(浮と)しあるをは
卯(う)づちおしうづれぐなりける人のしらざと
えしらまるぶりは山ちぐれつくまて、いら
ぬきそへたる枝は
まぶ(浮)かりぬ物はあれど君ぐるめかるき心
はまりとしらるん



とゞとかることとなる代にこそおもひける人
まやとおぼしうらぬるまゝにて目とまりて遊草
しるへなきけなりくいなべき文字もあら
ざめるとおぼしけれどもしこそおしきはおろかなんよとて
さりのぬ中あだなるかぬなどしていとおしくもきこつゝ
これなるさ人のとりつくんとひといふてくらぎ
まつるてなど志のびてのおふしまへもつらば
いろでくれしよしうきまし。すべて此うは心ちなうそし
すぐして侍り。おもひさ此にて。人はおぼとうなる
みそかしけれなどもくめば。おもひ乍おさなき
人なるこそそとの後ならでの冬人のまいらせける

けうものかほはいとうけくしかりかれど、宮(白)もいと
らうたくし給ありかり。けが(白ん)れかたりおはし
ましておやしうもあるかれ。うぢは大(芸)将のかうひ
ぬふことは年ごろたしずとさく中にも悪びて
よろとまり給時もありと人のいひしをいとあまり
ある人のかたことて。さるまじきところに接(さび)し
ぬふんことにつるはかやうの人かくしをさき給
へるなるべしとおぼしうることもありて。此文(学文ノタリミ)
ことはつけてづらひ給大内記(ないき)ある人(道定之)のかれ貢(芸)に
したしきたよりを覚し出て。おまへにめす。来(大内記)れり。
ぬん(白詞)ふたぎすべきに集(たふ)どもえり出て。こなるなる

げしまつむべきことなどの給ひきて、若大将乃
うぢへいますること、粗たしきてずや、寺をこそいと
かしこくいふりたるれ、いかでかうるべきことの給
へば、寺(大内記詞)もいとかしこくいかめしくいふられて、お(ぶ)
ぶ(ぶん)の三昧(ぶんまい)ざうなど、いとこうとくをさでられたり
となん、さてなふ、かよひ給ことは、こゝぞのあさげ
よりはありしよりもしばしく抱しなふなり、志もの
人ぐの思ひて、上志は、女をなんかつしすへさせなへ、
かしうはあらばおぼせ人なるべし、あれはたりま
ちうじ給所々のひとゝ、これ御得きまてまいりいかう
まつり、あねまさしあてなどしつゝ、家よりもいと

志のびてさるべきことなどともをかふいかなるか
さいはいべのさすがにころぼそくて此なへ家
なるんとなん。さぐこれ志も寸のころほひ口と。さて
給へしときこも。いとうれしくもこさて。いつかれと
おもほ志て。うしかはその人といはずや。かしこは
もとよりあるおまぞとふらひ給とさしし。おまい
らうはなんすこ持けり。此人ハいまこそられこうは
なん。きるこなげなさ女ぶなどもおまるこ志て。口おし
かるぬけもひにてゐて侍さとこきこも。おしこさと
れ。ほのころありて。いかなる人をかはさてすへ給
つらん。れいと氣色なりて。なべての人にくぬれころ

ありやひざりのおとゞなど。これ人のあまりあ心。
すくえて。山寺(ごく)まゝうさへともすればとまり給なり。
うろぐしさともどきなと罪しを。げまなどゝ
さしも佛(かさけ)のこちはせびありくらん。ある代かれ
ある里に心をとゞめたりとなんきてしかうこと
こそいありかれ。いづらひとよりはまめなりと
さしがる人しもことに人のせひいたりまじき。
ろ夜あるかまへことのなて。いとありしとおぼひ
たり。此人(大内記)いかれ蓋(芸)にいとむつましくつうまつる。
けいしのむこまなん宵かれいかくし給ともきく
なるべし。此心(白心)のうちはいかましてこれ人(俗)を。

こし人々ともろ〳〵のごめんの悪のさはりまですゝへ
よかなべてのこゝろしき人々はいかしごられにはうり
まはいかでかうしくゝめにはおん。心をとゞめて
きうしめくりけるも。いとゝ○つゝおぼゆ。さてそのこ
とばこれごろのおぼしまへり。のりちかいえん
あぢけなくまて。こゝろのどくまつはつきめしあど
いひて。人への心つくすめかくには何ともおぼさ○じ。
うぢへ志のびておりしまいらんことゞのゝおぼし
めぐらす。これ内記(ないき)に。のぞむこともありてしらうの
いかでかれもこゝろはいかんとやふこゝろ。此いかにかとし
あつしらめしつきいて。ふいとくことゞあるとも。

我いもんことはこぞりてんやちどの給（大内記詞）うしこ海
まてさふらふ。いと（白詞）びんちゃきとなれど。坡（かれ）うぢ
ますむらんひとはもやうほのうまうし人の。引来も
しらずありましが。ちね（茎）は易とられまけうとさく
あれすることこそあれ。こしかまはしらべきやう
もちゃ紙。こぞもれよりのぞきなどしてぞれかあらぬ
うとこうさぐめんとなんおもふ。いさくか人にしらな
まじきうまへも。いかゞすべきとのうまへだ。あれ（大内記ん）
ひづらひしとせんどおりし（詞）まさんことは。いとあらき
山ごしになん侍れど。ことに程とをくはさつらはず
なん。ゆつる出させおりしまして。ぬ孫の時には

おりしましつきなん。さて曉(あかつき)まうてをうゐら皆
給いめ。人のしりゐらんことはうゐぐれともはさふらひ
ゐらんとそはそれもふきこころをいかでかしり
ゐらんと申す。さし(白河)蒙(むり)も一ふびこうびかしひし
こちなりかろぐしきもどきおひぬべきが。ものゝ
罪人のつくましきなりとて。(白ん)ゆるあるまじきとは。
我(まが)れ心にもおぼきどかうまでうち出ひつれば。
えしひとゞめ給いず。(白)れともはまうしもうしこれ
あるへしきれりしもれ二三人。此内記。さていれめれと
ぐれ義人よりかうなりえうろ(仏雲桂与時方之)つさ人。むつましき
かざりをえりなて。(蓋)ちねかふあすよもおいきじなど。

内記よりくあかいきくおひて、いでこうち給ひ
つけてもいましへをおぼしいづおやしきまで心を
おもきつくおてありきし、人のうあようしろめたき
ひざまもあるれとおぼしいづることもさ海ぐ
なるに、京のうちごまむげに人しらぬれありこそ
さはいへどえし給ひぬれ男にしもおやしきさ海の
やつれすがたして、れ馬(こむま)にてあれすうこうちも他
あそろしくやくましそれど、ものゆしきるハ
すこうろれ心なれば、山かうなるまくり、いけ
しらいかるらん、こあたすることもなくてかへらん
こそ、さりぐしくあやしうるべそれとおぼすり。

ころもさもぞおふ。ほうさうじのほどまでも。
れ車にて。それよりぞれ馬にはこてまいりけり。
いそぎて。よゐすぐるほどにおもしましぬ。内記
あないよくしれるが。此蓋の人にとひきこゝろかれば。
蓋ゐ人あるかにはよしで。あしがきしてあるなる
ましおもてとやをしすてこぼちていりぬ。内記ん我も
さすがにまぶこゝぬれすまゐなれば。こゞくし
かれど。人しげうなどしあるに。寝蓋(しんでん)のこれに
おもてに。火ほのぐらうこゝて。そよくとをとする。
まいりて。内記詞まぶひとはおもて。ゆるべし。こゞこれより
おもしまさんとしるべして。白をいれこてまつる。やをし

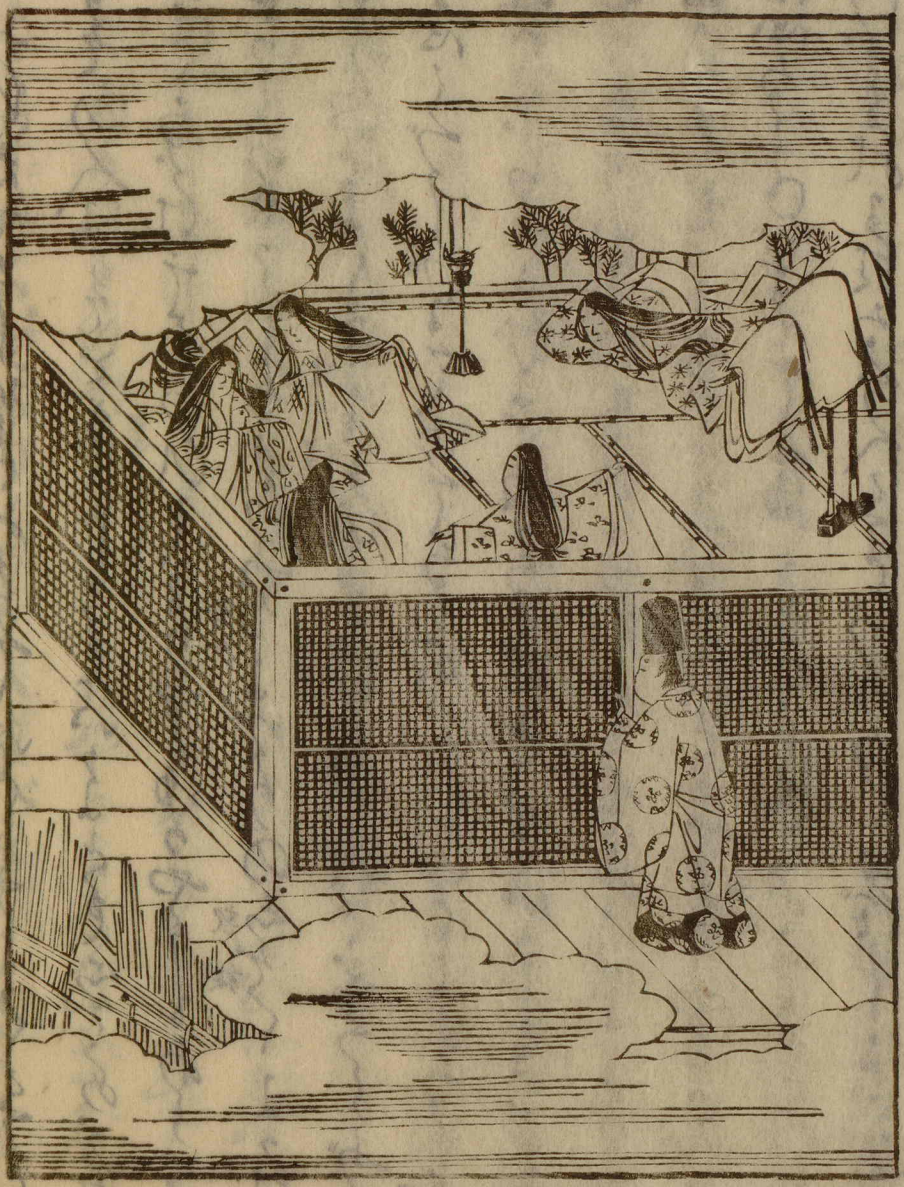
のぼりて。かうしのひまあるをこつけてより給ふ。
いふすれざらぐとなるもつくまし。あらしさう
さよげよつくまされど。さすがにあらくさくて
ひまありけるに。これかれこそこんとうちとけて。
あるもあるがぬるべし。其丁のるびらけかけて
そしやまとる。中あらうともして。抽ぬふ人三四人ゐ
たり。ひらたれおしげなる。いとなんでよろ。これが
かれ。まづかれはかげにこ給しこれなり。うちつけ
先うとれうるがいしこさる。右をとなれりしひらき
人もあり。君ハかひちを枕まして。中をちがめたるまゝ。
かみのこぼれかりたるひるいつさ。いとあてや

うまる海めさて。ふいのれ(中)うるまいとよう若しうり。
これ名をまれあるとて。うくて(左上詞)ひろ(右山へ入す)せ給ふば。とも
ましもえくりひろしを給ひじを。(意)ハこれ(ひ)うき
りのほどすぐさて。一日(ついたち)ごろまいかるすぐおりし
ましなんと。昨日(きのふ)のれ使(ミつひ)もまかり。れふままいいかぐ
きそしさきぬへりけんといへど。いふへ(浮)もまぐ。いと
抱ひしうかしきなり。おり(左上詞)さもひひうれさせ
ぬへるやうなんがぐるしさといへど。じかひ
うへ。それ(女ども詞)いかくなんひうりぬると。れきしそこ
きそしぬへらんとそよろしめ。うるぐしういかで
かは。とくなくていもひうれさせ海いん。れまれ(右山へ入す)

まうでの後ハやがてはるりおはしましねかし。
かくて心ばそこさやうなれど心にまかせてやすら
かなるはすまねにあらひて。なかくさびぞうす
べしやなどいふまゝあるハ（女ども詞）れ志げしかくて約束
さき給ふんぞ。のどやかにさ間よかるべき。家へなど
むかへなとせぬへらん後。おぢしくておやにもこゝ
ろてまつらせぬへかし。これおとゞ（めれとを云）のいとこうに
ものしぬて。にはかにかう罪なし給なありかし。
せかしもいまも抱ゆんじ志て。のどかなる人とそ。
さいたいにこゝろて給なれなどいふなり。名をなどて
これまくを（めれとを云へ）とゞめんてまつらずなりにけん。老（おひ）ぬる

人はむつましき心のあるよりこそとかくもいふめれと
やうのものと絶えしみなありけなまくきもあり
きりしとあきし出るも夢の心ちぞするかくもくら
いろさまでうちとけることもなとありてこそやの
けんとそいとめでたきれさいもあれ夜の衣の
さまかりめでたきれいとみひまそいかしうのく
ちり結あれどかざきむまれあて後にこゝろすく
ぞおりしますあるかくさししへども色のおはもで
此心のどかなるしこうもてあしておもしもあすま
しそいあれといふ夜ざるまあやうまきのそこく
きとうしずにとかりきとしますべきこともかと

いつはおすらしあきあぢうて。ひくこしすくこくと
よその人までとうじをいふともなぐさめ。られ
れいとなづけてをひそかにまり男ゆかしやうもあらばや
さつつへんなぞいふなるまづりの一つぞくまは
あんびそよくもまうのひらけるひれど。さらくずる
ま心くづしげまでおでなる雨いちれはひとしよなして
れいらぐらうらげま。庭なる雨ぞひとおうしこ。ある
さへなりあかぬ雨紙こうけさんまでざま。さづり
ゆうしと冬しまめくつ人をぞれとして君やこのべき
恋心なくまはまして夜まあすく語ま。いつでかれを
ロがまれまはちるすべきこけ。りあすく世ばしまどひぬ。



抱(浮ノ)へゆ(白ム)くべきなめり。おやはあるべし。いかでこ
ろもで。又はこゝろあふべき。こゝろひのほどにはまる
いかゞすべきと。こゝろもそらにあるりまでおをまもり
ゆへば右をいと(左を詞)ゆゑこし。よべもすゞろにおさ
あしてき。いとめてのほどにもこれはぬひてん。
いそがき給ひ。此車は日ふけてぞあらんといひて。
しさしたる抱どもとりぐして。車にうちかけなど
しつゝうたゝねのさ夜にはよりふしぬ。忘(浮)もすゝし
おくにいりてふす。右をかおもてにいさて。忘げ
まことぞきたる。忘(浮)の紙(おと)ちくふしぬ(左を)。ねふこしと
忘れぞ。いとさうねいりぬる気色をしまして。又きん

やうもなければ、世びやうまこれうしをこそ
給、右をこそつけてこそといふ。白 こそぞくりぬへぞ。
あて（左をん）なるもしもぶさとこそしりて。笠 夜のおりしうる
まやとせて。おさて出たり。先（まづ）これ（白訂）あけまとのぬへが
あや（左を訂）もうしなさほどまを作られ。夜はいたう
ふけぬらん抱をといふ。白訂 もれへ口たりぬべかなりと
仲信（なかのぶ 笠ノ家司之）がいひつれば。おどろかれつるまゝに出たちて。
いとこそよりなりつれ。まづあけまとのぬふこゑ。
いとようまもびませぬて。世びこれば。左を 世びもからず
うへ（戸を）もなる。白訂 こちまていとつりなくおそろしきと
のありつれば。あやもうさすぐさに成てなん。出くらう

なきとのゐへが、おないうじとあらてまどひて、ゆハ
とりやつまり、まれ人(白河)まうすなよ、さうりゝて人おど
ろかすなと、いとらふく志されこゝろまて、もとより
ほのうま(ふ)ゐれこゝろ、ふぐかれ(差ノ)けちひまゝ
びていり給、ゆゝ志(たをん)きことのさ夜とのゐへる、いゝ
ゆ(ふう)れすぐさなんといとおしくて、我もかくろへて
こゝろてまつる、いとほそやかなるよくとさうぞ
さて、かれうけしきともをとらず、ちうう(白浮へ)よりて、
れぞどもぬさなれがほよ打ふしうまへれが、例(たを河)の
おもしまてなどいへど、もれ(白)もの給ぬ、れふす夜
まいりて、ねつる人(たを)どおこして、すうし志ぞさてこれ

ねぬ。れとものの人など。例(れい)のことは。しらぬなるひ
まて。衰なる事のおりしましざ由かれ。かゝる所なり
さ由をしらんじ。しらぬよしまじ。さうしらがれ
人もあれど。あるうまゆへ。事ごゑはさくめくしまぞ。
しかましきなどいひてねぬ。女(ゆん)恵もおらぬ人
なりかりとしふよ。あさましういうじ。それどこゑを
ごまとさせ給ひず。いとつましかりし。取まて
ごまつりなりし。此心なれば。ひとふかよあさまし。
もじめよりあらぬ人としりたらぞ。いさしかいふ
かひもあるべき紙。夢のうちするよ。やうくその
なりのつらうりし。としどろおもひつゝ家さ由

の給ふ。これ家(句)をしりぬ。いよくしづしく。かれ
人(仲)のおぼさんことなどせよ。まゝ無けきことな
れば。かざりなうなく。家(句)もなくまて。さやすく
あひこざらんことなどをおぼすまなさぬふ。東は
こゝあけまあく。れともの人きてこはげくる。右を
きてまいれり。出給(句)へん心ちまなくあらずあれ
なるよ。まゝおりしまさんこともかゝるれば。京には
もとめさはがるとも。かふがりはかくてあらん。なほ
ごともいけるかざりのゝめこそあれ。こゝいまいで
おりしまさば。まことにしあべくおぼさるれば。この
右をとめしよきて。いと(句詞)こゝちなしとせられぬ

べきれど、かふハえいづまじうなんあるおのこどもハ
これつたりちかくらんところによくかくろへて
さふらへ、時方ハ家へまゐして山ちに遊びてなんと
つきぐしかくんさ海にいらへなどきよとの給
にいとあきましくあされて心もなかりけるよれ
あやまち後せふにこちもまどひぬべきを、心しげ
めて今はよろげにおぼくれさもぐともひあらじ
まれうちなめげなりおやしかりしおりにいと
かうおぼしいれたりしもかうのがれざりける
れすくをにこそありかれ、人のしたるつぎうはと
しひなぐさめて、かふれむ人まとゆしをへうに

きさせ給りんとするゆゑとまかうのがれきこえ
させ給まじかりけるれすくをは、いときこえしさせ
給らんかたなし。おりこそいとつりなく給れがふは
いぞおりしまして、れ心ざし給らば、のどうまもと
きこ白。およすけてもいふれと思して、我(討)は月
ごろ抱きつるは給れもてまれが人のもどうんも
きらず。ひたふるはきひなりまたり。すこしも身の
こと我きもぐらくらん人のうるありきはきこちな
んや。れかくりまは、かふもまれいとなどいへうし。
人はきらうまじきことを、女がためまもきへうし。
ことるはかひなしとのまて。此人(浮)の世はきらず衣は

おぼさるくまくまはよろづのそしりもワすれぬぬ
べし。右をいでゝ。これをとゝなふ人まかくなんの給ハ
する。御料いとゝこまなんとを申さをぬへおさ
ましうめづらかなるれ有給ハさおぼしめ給とも
かるれともの人どものれこころうこそおしめ
いかでかう心おきなうハあて生り給しぞなめげ
なることを罪しさする。山がつなども給らましかは
いかなるましといふ。内記（みいき）ハげまいとワづらもし
くもあるかれとしたそう。時方（ときかこ 太を河）とおぼしらるくも
されまかさなんとつくふ。ぴらひ（時方河）てかうがへ給こと
どものおそろしかれば。さらずともまかてまんでぬ

べし。まめやかなをろかなるゝぬ此気色をきこえて
まつれば、これもくもをすてゝなん。よしく夜ね
べもこれおきぬなりとていそぎ出ぬ。右を人は
たらすまじうは、いかゞはこばかりべきと。まりなう
おぼゆ。人ぐおきぬるゝ。夜はさりやうなれていこぢう
志のびさせぬふしきこえてまつれば、こちにて
いこじきことのありけるなめり。此ぞだなど。よさり
志のびてもてまいるべくなん。仰これつるなどいふ。
ごごちあるむくつけやこゝろやまはいとおそろし
かなり山ぞかし。例の此ささもおりを給はず。やり
おておもしましけんよ。あるいこじやといへぞ。

あなが(左を同)風く。下(げ)もなどのちりげりもきくこゝんは。
いといこじかゝんといひねこうこうちおそろし。
あやまくは(左をん)(蕉)愛の此使のあらん時。いかまいたんと。
くけきれ親(ぐんぐん)看。かふとなくてくらしぬへと。大(ぐぐん)鶴
とぞこそけり。石山(いしやま)はかふまゝでさきんとて。母君の
ひかふなりかり。これ人ごもこれさうじ志。さな(粘を)
まりてあるは。さらが(今同)かふはえいこゝを給まじき
なありれ。いとくちおしきことといふ。日こうくなれば。
かうしなどなげて。太をぞたくつうまつりけり。
もやのすゞれはこれおろしいこして。もれいこなど
くとてつけたり。母(浮母)君もやこづくらおいすりとて。

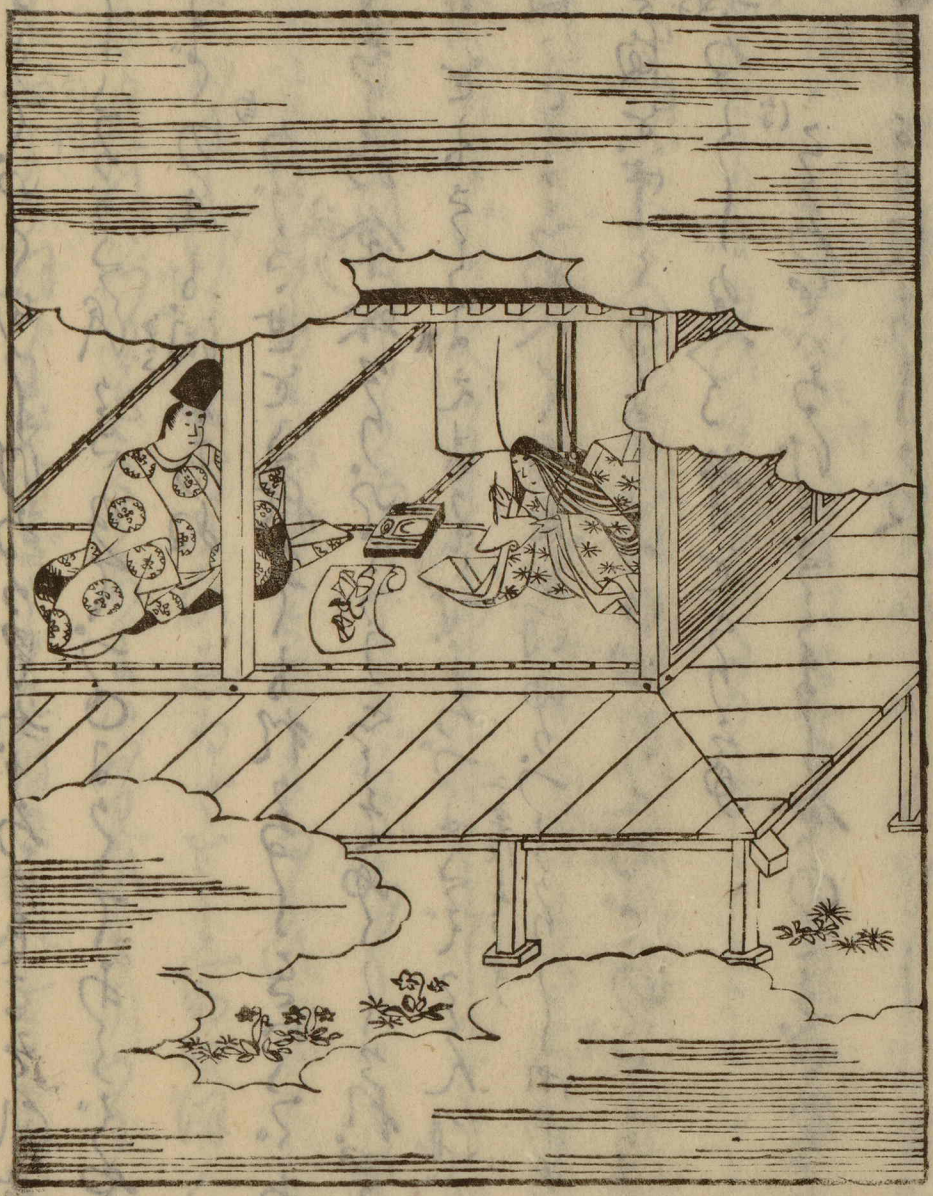
爰ミさちがしかりつゝいひなすなりかり此てうづ
などまいりたるさ海ハ例のやうなれどまうなひ
めざ海ゝうあげされて（白詞 浮ニ水先つひ浪ヘとも）そこなあらいも語ちごと
のゆふ（浮ん）如いとさ海よう心よくさ人とこゝなるひたる
ま時のまもこざらんハしぬべしとあげしてがなく
人を心ざしかしとは、かるをいふまやあらんと
ゝしらるゝまもあやしりけるかれ、これもく
ものゝ罪しあらがいかなあげさんとまづかれう（中）への
此ころをゝ出さしなれど（白詞 浮ハ浪ぞとの心也）しらぬを思ゝいと心うし
なれあらんまゝまのゆへいうじさげすといふとも
いよくなん哀なるべきゝ、けりなうとひたまへど

そのほかの人〻にてそれ次第ごとくしもいとおかし
くげだちは皆は人〻にしてあそびき
ことさら（白ん）いと限（かぎり）なうらう〳〵しきのこと後日しらく
あまた程に、むく（浮母より）への人にまいる車二馬あまた人ぞ乃
例のものくるる七八人ぞのこだおほく見るべく
しらきぬけさひ（さ）ざえづりいりきたれば人ぞ（浮ノ女九）
くるまいるがりて、おほく（ひ久の人）まうくれよくいち路
あざす。右をいりまちんとみえあえするといひ
されは京にさばかりの人のおほかるをずとの
げにきこえひてすれあきこともこそあれと
やそ、これ人ぞまもとをいひあそびをずあまく

よべよりけぶれさせぬて、いとくちおしきこと後
おぼしなげくめるもしまこしよひ長ミさはがしく
ミえさせぬへれバ、かふばかりいしくしまきぬへとて
なん、抱いミまて侍り、長ミ口おしく、抱の海ふげの
やうにこそてまつり侍とうきて、人ごにまれなど
くちきてやまつ、おまぶ君にもそふハまれいミまて、
けさり語ぬといちきたり、れいハくしくがくの
ミかすめり山ざハをながめ、傀ぬまくれ列ハまび
しくのミおぼしいとなく人にひかれてまつりて、
いとちかなう、量ぬ、まぶりくことなくのどけさ
長の日にこれどもしくあるぞ、それことぞと見ゆる

ん夜なく。あいりつさちつしくあしげなり。
さかいかれ。蒼のれりこはまをさりなり。大夜志
志のさりは白ひゐへるあたりまてはこよなりう
べきほどの人と。夜ぐひなくおぼさるほどなれば
まぐしらずおしとのこみゐふ。女はまた大将殿を
いとしたよげに。又かゝる人あらんやとこしかど。こ夜
やかに白ひきらうなることは。こよなくおもし
かりとこう。すぐつまひきよきて。手ならひなどし給。
いとおしげにかきすさひ。志などをこ所おほく
かきゐれば。つかさこちはいおもひもうつりぬ
べし。心よりほかに。えこぎらん程は。これをこゝ

よとて、いとおしげなる男女（おとことんな）、まろともにそひ物
しこうかる紙かさなりて、つゝまかくてあらばや
なまどの絵も、泪（なみだ）おちぬ
白 ちぎりき世をこれめても相かなしきはこゝあ
すきらぬ命（いのち）如かり、いとかうしきそゆくしかれ、心は
所をもさらにえまかせず、よろづにこぞかんほど、
夜ことにしぬべくなんおぼゆる、つらかりし（二条院そくらす）はあり
さ夜を、中々なまくこゝ出けんなどのこまふ、
好（浮）ぬらしぬへる筆をさりてゆ
浮 こころをばなげかざらまし命のこさぞめなき
世とおもはましかば



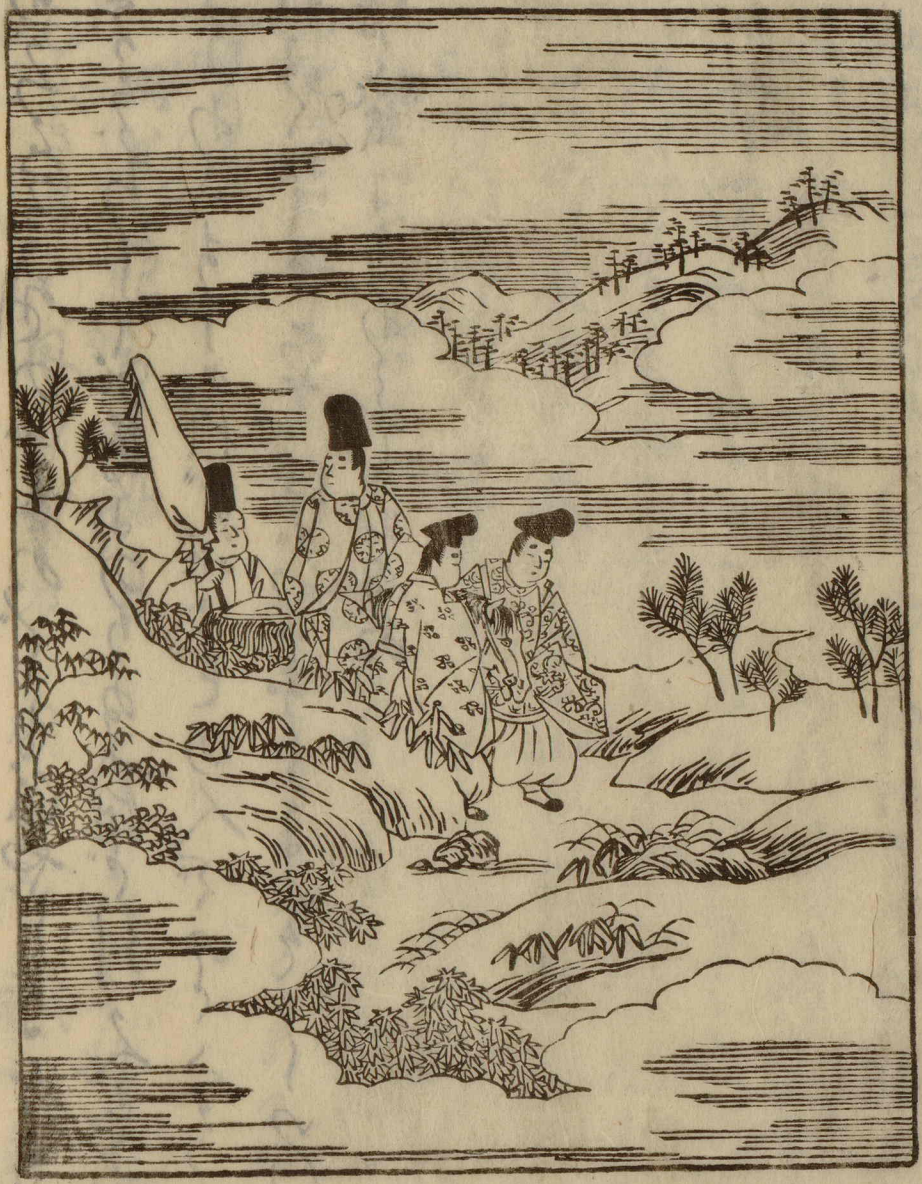
とある紙、かたらんを（白ん）ばうらめしうしぶべりゆり
とこぬふまも、いとらうたし、いかなる（詞）人のこころ
がたりをこゝろひてなど、ほゝ思うて、大（蒸）ねのこ
こまつこしそめ給けんほど紙、思しゆしがり
ぬてとひぬ紙、ぐるしがりてえいたぬことを、
かうの給こそとうち思じたるさ夜もつびたり、
をのづからそれはきて出てんとおぼす拍ふ、
ませまほしさぞつりなきや、よきり、（聖入てきたりを云）寄へつりて
つるさいふ（時方）来りて、なをまあひたり、君のこやより（きたい時方詞）も
は使来りて、左大臣殿（ひたりのおほいとの夕）もむつりつれしさをなて、今
しらさせぬたぬはありきは、いとかなしく

なめげなりこともあるをすべて全うちなどまこさし
めさんことも身のためなんいとからさと。いこうじく
ゆさき給かり。東山まひぢりあらんじまとなん。
ひとまはもれし給つるなどかたりて。女こそつこ
ふうおもすりもれまはあれずどろなり見證抽ちうを云へけそう乃
ひと後さへまどりしまて。元言をさへきさせ給よ
といへば。ひぢりの名をさへつけきてさせまて
がれば。いとよしつたくしのつこもそれまてほろ
がし給らん。時方詞 時ごとまいとあやしきれ心のげよ
いかでなりもき給けんかもそうおりしますべし
とうけ給はりしまもいとかたじけなかれば。

毎だらり罪しきてまし抽成おふちきれありき
ましそしとあつひ罪ゆ。まいりてさるんとまゐび
罪ゆれば。げ(白ん)はいかるしんとおぼしやるに。前をき
力しそひびしそれ。かろしかるる程の数上人など
まて。志げしあらばや。いかにすべき。かうつてむべき
人めもえたぐかりあふまじくなん。大(芸)ねもいかる
志もんとすしん。さるべきほどにいひなぐらおや
しきまでむかしよりむつましき中にかろ心の人
ぶてのしられしんぬ。だづしうまくいかり
ぞや。よれことひにいふともあれば。まちどをなる
ひがとうりをもしぶ。うしこれ給りんをさん

なんなりふ。夢(白詞)にも人にしられ給まじき面にて、
こゝなしぬところにぬてもなれしてまつらんとぞ
のぬふ。(比)ぶきへかくてこもりぬのべきなし。ぞ出
給なんとするにも。袖の中にぞとゞめぬへんかし。
明にてぬさ紀にも。人ごしらぶきおどろかし。寄
ゆつま(白)戸にもろしにぬておりしてえ出やり給いず
世(白)にしらずまどふべきられさきにころ泪(なみだ)も
こちとかきくらし。何(なん)如もかざりなくあれ
としかり
泪(ほ)をもほどなき袖にをきかしていかに別を
とゞむべき身ぞ。風(白ん)の音もいとあらましう。霜(しも)ふる

あらうさま。をのがきぬぐもひやくかるなり
こうろうしてれ馬にのりぬふほど。引人をや
うるあさましかれどれともの人ぐいとこゝふ
れまくしとせて。こゝいそがしにいそがしいげ
れど。白心 祇にもあらで出ぬぬ



これ五位二人なん。此馬のくちにはさしひかる。
さがしさ山こえまてくぞ。をのく馬にまたのる。
白山
汀のこほりをふみならす馬のあしをとさん。心
ぼそくもれがなし。むかしをこれこちてのみ
こそいかる山ぶみは志給しかば。おやしかり
ける罣のちぎりかれとおぼす。二葉院におかし
ましつさて。中
如君のいと心うかりし此地がくしも
つらそれば。心やすきかるにおほ殿でもりぬるに。
孫これ給はず。いとさびしきさま。もれしひまされば。
心よりくさいまはりぬぬ。中ノ
ちるにごろもなく。いと
ちよげまておはす。めづらしくおかしとこ給し

人(ほ)よりも。まさこれ(中)はる代ありがたさ。さ海を志給
へりしとこゝ給物から。いとよくまたるを。なまひ出
ぬも。むまゝ。ふるがれば。いたくも。れ。なげしたるさ海
まて。三丁はいりて。なほとのごまる。女(中)君もぬていり
きたしなて。心(旬)ちまていとあしかれ。いかまゝんと
するまゝと。ころばそくなんある。丸(まろ)はいたじく衰と
ミをいたてまつるとも。れ有さ海はいとくくかたり
なんし。ひ(芸中とうすひ給りんとのふ)とのほいをしなしず。なるふなれぞと
のぬふ。かし(中ん)かしぬことをも。まめやかりさへの給か
なとせて。かし(詞)きてまくきことのまり。笑しさしバ。
いかやうに笑しなしたるまゝと。人(芸)もせより給りん

まそかさましかれ心うきものは、すゝろなることも
いとくるしくとて、そむきなべり。旬 家もまめこちなて、
詞 まことに川しくしとしこさしゆることもあらんは、い
うばさるべき。丸は此ことあるはなろう味(ちう)へかは。
ひとしきがうしなどさがむるまでこそあれ人(芸)には
こよなう旬(旬を)ひおとしなべかるも、それもさべ
きまこそもとことちらくなべて給此心
のかきなん。いと心うきとの給ひも、すく(浮ノ事)をの
をろかなしで、弱よりこそぞうしとおぼし出るに。
泪ぐまれぬ。中ん まめやかなるをいとおしう、いかやう
なることをこさくなへるなしんと、おどろかるゝに。

いへ人に語らんこそまさし。袖りうさへ海まで
こそめ語しるなどともかくしてはいひけり
語りそてはおもしめずらなる人をさそふべくて、その
心よきはさまりけりめなどしいふあやまち計は。
おぼしとどろあまりてとおぼしつづくるもおぼろげ
なつかしくて、いつぞらへげなるれけるひなり。
白心　浮
見し人、こけるりとは、さすらしきせこそまつ
らば、とおぼさばごさ海まちまでこしこおは。
中心
さごこのさぬのれことは、ますめくしくの語とおぼ
すまひとや夜ごとこしかるやうまでしこん
あらぬぞおぼすありやなしや、あそこらめまほしくて

まつらんもたづしうちより大宮の御ふこあるに
白ム
おどろきなてな後心とけぬ御ひしこまておるる
まつりなぬ唯日のおぼつるさ後なやまさくおぼ
文行
されさるよろしくいまいりこまへ久しうも
なりまけるとなどやうにさてしなへれバさはがれ
こてまつらんもくるしそれど夜ことに御心もも
こがひさるやうにてその日ハまいり給もず上遊ア
などおまるまいりなへどこすれうちにて蕾
しく給夕つる右大将まいりなへり白詞こなるにな
とてうちとけながらこゝめんしなへりなやまし
げにおりしますと待つれバ宮にもいとおぼつ

なくおぼしめしてなん。いかやうなるれなやうな
かと罪しぬふ。うろうらよろうろさまぐぎのいとぐま
されば。ことずくなまて。ひぎり（芸ノ）ざりといひながら。
こよれかりけり山ぶし心かれ。さぐり衰なる人（浮）を
さてとさて。心のどうな。月日を約（浮ノ）もびさすらん
よとおぼさて。例（地）はさしもあらぬ。とのついでよぐな。
我（芸ノ）はまめ人ともてなし。なれり給を（白ノ）わるがりなて。
よろげるのなひやぶる後。うろこと見あらはい
さる後。いかるの給はまし。されどさやうのさは。ふれ
ごともかけ給はず。ひとくるしげるこえ。さまへだ
ぶ（芸同）びんなるつぎかれ。おどろくしかしぬれうちの

さすがに日ぐすりは、いとあしきつぎに侍る。此屏
風よくつくろはきぬへなど、まめやかに思ひとまて
出ぬ。(旬ん)おづしげなる人なりかし。つがありさ海を
いりにさくらべけんなど、さ海ぐなることにつけ
ひしも、こゝにこれひ(浮)と紙。時のまつすれば、見しいけ。
(浮)りしこゝには石山もとまりて、いとつれぐなり。此(旬)
ふこゝには、いというじきことに紙かさあつめなてつゝ
ひす。それぞに心やすし。(時方)時方とめして、さいふの
ずさの心もしらぬしてなんやまけり。左をがふる
く(旬ノ紙を云へ)しれりけり人の。(蓋)夜の此ともまて君の出たり。さ
らがへりて念(れん)じがると。(左をが)夜ごちにはいひきりきたり。

よろげ右とぞ宛ごとしなるしひけり月もこちぬ（二月ニ曾ニ旬ム）かう
おぼしいるれど、おりしますといひとりなし。
うのミ掛紙せちじ、さしまえなるがしふまじきも
なありと、こころぼそき紙そへてなげきあふ。（芸）大将殿
すこしのぞくなりぬるころ、例の思びておりし
（宮法ニ）
より、寺（てら）に仏（おけ）などおがミ給ひず、（寝）をさせ給僧（そう）に、もの
あひなどして、夕つくこしにはしのびこれど、
（浮ノ方之）
これいりなくもやがし給ひず、（芸）思ばしなをし
のすぐるいとあしまほしくきこゆまでおゆミいり
給ひ、たづしげによういことなり、（浮ム）如いかでこえ
こてまろしんとすしんとそしさへたづしくおそ

ろしきまおながちなりし人(白)の此有様ぶちせひ
せらるゝまゝこれ人(芸)まこえてまつらんを思
やりなんいうじう心うき我(白)はさしどろうるひと
ともこれせひかちりぬべき心ちなんすうとの給
しをげまその後此こちくるしとていびくまも
いづくまも例の此有様なしで三ず法などさいぐ
なるをきくまゝまるいうまきて(白ノ)おぼえんともふも
いとくるしこれ人(芸)もるいとけきひことる心ふく
る夜めしきき夜もてひ(詞)さしうりけう目どの
をうらりなどの給もことおほうらず忘しうれ
しとおりうれどつゆまあひこぬ恋のくるし

さ紙・さ紙よさほどようちの給へる・いうじくいふ
まはまさりて・いと衰と人のせひぬべきさ紙をしめ
ゆへる人がらなり・えん（淳ん 薫ノ事を云）なるなるもさう抱まて・ゆく
すゑなるぐ人のこれこゝめべき心ぶへなど・こよなく
紙さりゆへり・せもぐなるさ紙のこころがへなど・まり
きうせこそんときなれめるしぐいうじくしそあべ
それ・おや（自ノ事を云）せうまつし心まそうおぼしいらる
人を衰とせふも・それいいとあるまじくうろき
ことぞかし・これひ（薫）とまうしとせられて・これゆひ
なん心ぼそさはいとふうせこゝめべそれど・おまひ
こゞれこうそしき紙・有（薫ん 淳ノ事）ごろこよなうものこころ

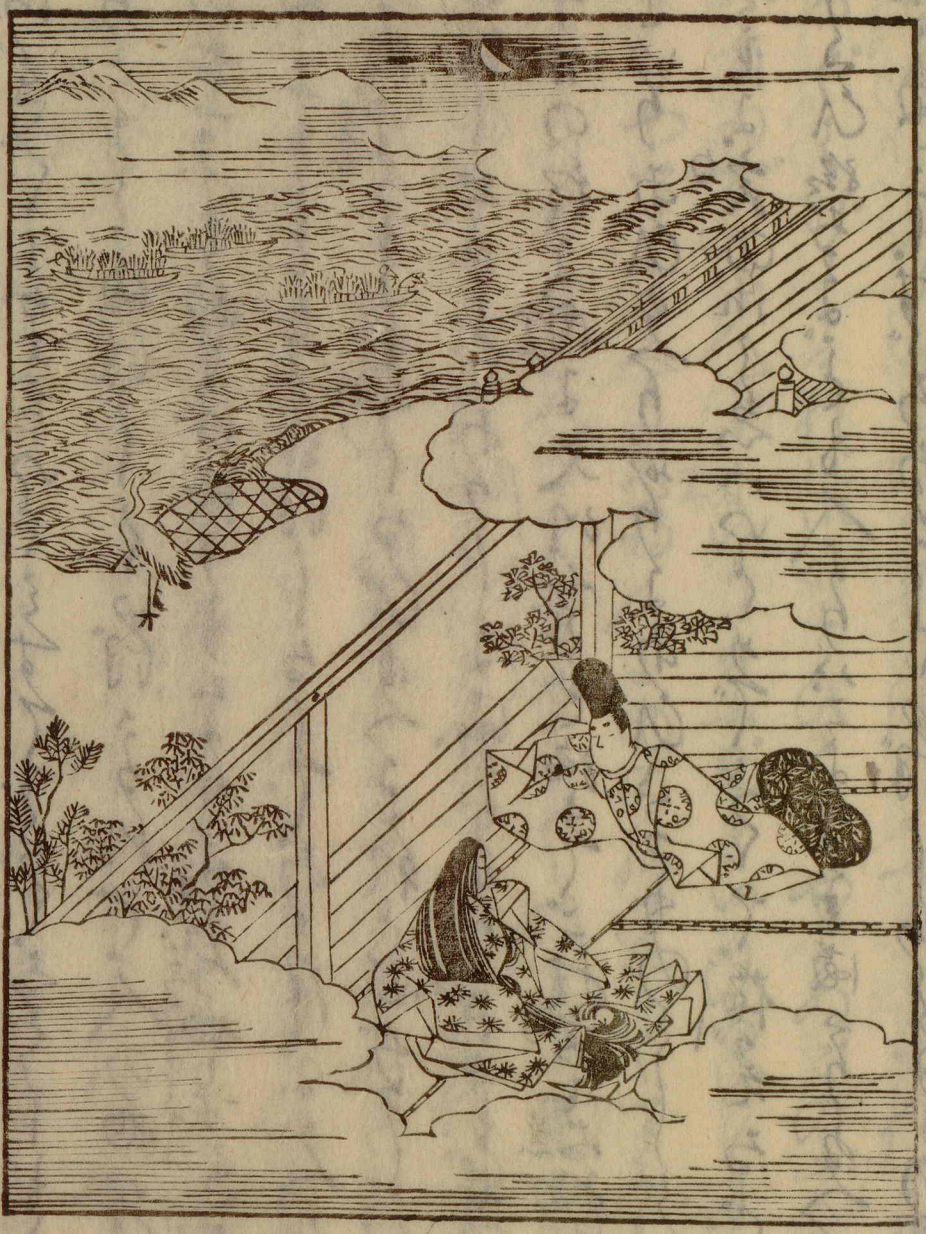
しり。ひびまさりまさり。つれづれなるすまひの行ま。
むのうすことはあらじかしとこゝろもふも。心づくし
それば。つゐよりもこころとゞめてかたらひ給。川(蓋汨)くら
すゝ所やうくよろしうしたるしてぞり。一日(ひとひ)なん
しかば。こゝよりハけぢかき水ま。茶もこ給ひべし。
三葉宮もちかきほどなり。あけくれおぼつかなき
へだてもをのづからあるまじきを。これ蓋のほどま
さりめべくハつくしてんとせてのゝふも。これ人(浮ふ旬)
のどうなるべきところ。せひまうけたりと。昨日(きのふ)も
のゝへりしを。かくることもしらで。さおほ(蓋ツ)すらん
よと哀なるべしも。そなたまるびくべきまはあらず

うしとせかれしまゐしれさ海のおもげにおぼ
ゆれば我ながらもうしてころうれこやと心ひつ
かてなきぬ。れ心（芸詞）ぢんのうしでおいしかなりし
こそのどうにうれしかりしが人のいかにきこそ
しらきこうことかあるすうしもをろかなすらん心
ざしにていかうまでまいりくべきこれほど。君の
ありさ海にもあらぬ御なぞ。つ（地）いたちばの夕（中）月
夜（上）にすうしひしちかく（芸ノ）ふしてながめいぐし給
へり。男（芸）は通りしかの衣ともおぼし出て。女（浮）はいま
よりそひこそ身のうさ御なげきくりへて。ふるこ
にもれおもひし。山（地）のくはいかすこんぞてしさむき

すさ紀まくてろ。かさくぎれすぐるも。取からいはと
おかしうミゆるは。宇治橋のちろくとこゝもるさ
ふくは。紫つミ舟の取ぐはりちがひたるなど。ほか
まてハめなれぬことぞのミ。さりあつめたる取なれば。
ミ給さびごとは。れそのうミのことのさぐ今の心ち
志て。いとかたらぬひと紙ミかたしたんだり。
めづらしきなれ衰おほかるべき程なり。まいて恋
志き人はよのてへられたるもこゝなるらず。やうく
抱の心志り。頼なれ切宵き風のおしきも。こよれ
くミまさりしたる心ち志給は。女ハかきけつめたる
うろのうちは。もよほさるく間ともすれば出たるを

慧ノ
あぐさめる○給ひて

慧
宇治ちしのあづまさちぶりはくちもじを
あやぶむるに心さもぐれいまこゝのひてんとの給
浮
こしまれこ世のはあやうき宇治橋を折
をぬまれとあ紙これめとや



ぢさぐ（芸ん）くらもをいとこすてがたく。しばしもさ
ちとまゝ雨ほしくおぼさるれど。人の拙いひ
のやすらぬに雨さらにより。うろや（京にむかんとのうす）すささ
雨にてこそなどおぼしなして。おろ月にかへり
なぬ。いとよう（芸ん）もおとなびなへるかれと。心ぐるしく
おぼし出ること。ありしに雨さりなり。さ（地）さゝ絶の
十日の程に。西（今上）に文川ゝを給とて。これ家（白）も大（芸）物も
まいりあひなへり。おりにあひたるものゝしらべ
どもに。家（白）のれこゑはいとめでたくて。梅がえなど
うたひ給ひなにごとも人よりは。こよなう雨さりなへる
れに雨にて。すぐろなることおぼしいとなくのこ

なん。つゝみなくはけり。雪にはかよみりこぐれ。が鶯
などもげしかれば。れあそびとくやこぬ。この安(白)の
れ夜ね所に。人ぐまいりぬふ。抽まいりなどして。
うちやすゝめへり。大(荒)ね人に抽の給りんとて。すゝし
もしちく出めへるに。雪やうく川もり。星(かく)の光(ひう)
におぼく志き紙。やうは(荒ノ)あやなしとおぼゆる
に用ひありさ夜にて。初かうしきこよひもやとうち
ずじめへるも。ちうなさこと紙ろうずさひつり
のさまへるも。あやもしく衰なるかしきそへ。人ぐ夜
にて。いとも此みげなり。とし(白ん)もそあれ。こ(白)やは
ねうやうにて。ぬうろさくぐ。なろ(荒ノ)かはしもも也

なめりかし。かたしく袖を我のミせやるこゝろし
つるを。おなじこゝろなるも哀なり。まびしくもある
れ。かぎりなるもと川ひと代なさて。我かくとり
まさるせひも。いかでかけくべきぞと。ねたうおぼさ
ふ。川とめて雪のいとたうつもりたるに。文とて
まつり給ひしとて。れまへまいりぬへるれかたち。
此ばいうじくさりにさよげなり。かれ君もおなじ
ほどにて。い内二三まさるけぢめもや。すこしはび
まさる気色よういなどことさらにも川くりたん
やうに。おてなる男のほんにさ川べくもれし給
れ川のれむてにてあるぬことなしとぞ。世のひとも

ことたりけり。ざえなども。おほやけく志きかたも。
とられずぞおはすべき。ふしかうじもてく。これ人
まうで給。白ふやのれふこ後すぐれたりとずじのく
志れど。白ふおまとも。さくいれ給ず。いかなる心ちまて。
意語を云へ
うることをも志いげんと。そらよのこおもほし
ほれたり。此人芸のれかしきまも。白いとじおどろかを
給かれば。おさましうたぐりて。宮語へおりしまたり。
京まは夜まつづりきしのたりたる雲山ふくいる
まゝまやくふりつゝたり。常ほよりも。ひりなきまれの
ほそこち後ひけぬふほど。れともの人もなきぬびり
おそろしう。ひづくりしきことをさへせふ。志なべの

内記(ないき)はしさぶの少掾(ぜう)をうけられけり。わが前(まへ)も
いげ方もごとくしうるべきけりさえすがくいとと
つきぐもくびきさあげちぶしさふかすがくしもお
うりかりかり。浮しろつは。白ノかもしきんとおりつれど。
くろ雪まはとどうちとけるくゑは。表かけて上(うえ)白とま
きうそこうしこりおさましう表と怒もおもへり。淫ん
上(うえ)白といくまありきてまべきされ自猛りのくとごけい
くろしされど。地ごこるひいつくましさき云めべしづひ 太夫ん
人さむくるともたまれど。おまじやすまじつくく 平の
おぼいさろりつきし人の心ざ庵おふありくしぬなそくく 作者 奥夕きこへ
らひてやうじくりるさるく。おなじころうまあて 太夫詞

うくしぬへといひてゲリ。まろとも（右をと給ひ）はいれ（白を）さて
まつるこちの程はぬれぬへるれぞの香（か）の前をうは
ほふも。まてゆづらひぬべくれど。坂人（かの）の（其）れけりひは
川（は）をてなん。まてまぎらりしけり。東（白ふ）の程は立かへり
給ふんも。中々なるべくれど。こゝのひとめもいと
つましさは。時方（ときかた）はさばかりをぬて。河よりをち
なる人の家（いへ）はぬておはをんとかまへたりくれば。さき
ざてゝ川かりしたりけり。東ふくる程どはまいれり。
いとよくようゐしてさふらふと申さす。こはいかは
志給ことはかと。右をもいと心あらたしくれば。
れをびれておさたりこちもゆるくれ。おやし

ひらもべのゆきあそびしるしけもひのやうにぞ
ゆるひあがりけるいでゝなどもいひあへさせ給
ぎ（浮と）きいざまて出ぬ。右をいこのうしろこは
ちぐまりて。侍（ぢじ）従なぞこて（浮の俗ニ）まつるいとちるなげなる
もれとあけくれこいざす。ちいさき舟にのりなて。
さしひたり給程（浮ん）ちるゝなるん（きし）岸にしもこぎいなれ
こゝんやうに心ぼそくおぼして。つとつきていざ（白ま）
れたるもいとらうしとおぼして。省明の月すこ
のぼりて。水のおもてもくもりなきに。これなんたち
ぢれの小嶋（こぢま）と申て。此舟（中）志がしさしとゞめたるなこ
ちゝへばおぼしやゝなる岩のさ海して。ぢれたる

とさまぞのうげしげれり。白討 かれこゝへいとゝられ
かれど。手手おふべき。みどりのふきをとのゝて
白 さしふとも。かゝらんもれかゝち。蓋の小嶋の
さゝるちぎりこゝろは。浮 女もめづらしからんこちの
やうにおぼえて
浮 こちぐれのうじ。雨にいろもかゝらじを
これうき。手ぞゆく。濡しられぬ。白ん おりから人の
さ。雨におかしくのこゝちにごともおぼしをす

時方が志るべの和と云へ

かれこしなさしつきて。おり給ふ。人(句ふ)はいざ(浮と)りを
給ふんはいとこころぐるしかれば。いざ(句ノ)きなくて
こすけられ川くいり給ふ。へ(地)とこぐるしく。なる
びと給ふくもてきたぎなふらんとこえてま
ける。時方がをぢのいなばのこなるかがらうずる
さうは。かりなりうけくりたる氣なりかり。まざいと
あらく志きる。おじろ屏風(びやうぶ)をまど。給ふんじ(句ノ)も志
らぬ志川らひまて。風もしとまさちらず。かきれ
もとは電むらさしつて。今もうきくもり川くふる。
因さし生て。行(のき)のこるひのひかりあひたるは。人(浮)の出
かたちもまさる心ちす。家(句)もところをきたの国どに。

うるしかるべき程どれれぞどもなり。女(注)もぬぎ
すべきを給てしかば。程そやかなるすがたにいさいと
おりしげなり。ひきのくろふともなく。うちとけ
たるさまに。いとたづしくまばゆきまでさよら
なるひ(白)とまさしひかひたるよと。おもへ(注ノ)どまぎれん
かたもなし。なつしきほどなるしろさかぎりな
めづり。袖くちすその程どまでなほめしく。女く
まあまたかきのたんよりもおしうさなしたり。
つ(白ノ)のまゝ給人とてもかくまでうちとけたるすがた
などは。ゑなしひなもぬなかたるさへぞなほめづら
しまおしうおぼされける。給給もいと花やすき

けり人なりけり。これ（ほん）さへかうなをのうりなりしみ家
よく。安（ほ）ぎ。はいえじとせふ。家（句詞）もこれは又こそ我ゐ
もすれよとくちがうめ給を。いとめでたしとせ
ふうしたり。こゝの宿（やど）もりまてすこけるも。時方（ときかた）を
もうしとせてうしづさありけど。このおかし（句ノ）ますやり
戸さへぐてく取しがほまゐ（時方）たり。こゝ思ひきまぐめ
うしこまりて。抱がたりしけるを。いとへ（君より）もえきぎ
おうしとせひたり。いと（時方詞）おそろしくうちなひたる抱
いこまより。家れうちをさへさりて。いくしむなり。
ほかれ人よすなといひたり。人（句ゐ）めもたゝて心やすく
うさしひたしぬふ。れ人（芸）のものしたまへるけ

んよ。(ほノ)かくてこしつゝんかしとおぼしやすて。
いとじくこしこゝのふ。二(芸ノ)の文をいとやむごとなくて
もちこそまつりさまへるありさ夜などもかゝり給
(芸ノ衣ゝてしたとの給しるす)
れこゝさゞめのひし一ことは。(地)のこまひ出ぬす
まくこさや。時方れてうげれくぐれなどさりつぎて
まいる紙(白ノ)れんじて。(詞)いとじくかしげか家め家
(時方との給へ)
まゝうとれぬし。こさてなこしそやと。いまし先ぬふ。
仍須色めしきつうどれこちよいとおかしと
せて。これ(時方)大史とぞ拘縱してくらしけり。ゆきの
ありけれるよ。紙(白ん)すむかたをこやるとのへ。(ふすこ)霞乃
こしくよ。(こずゑ)木末ばりこゝ。山ハかぐこ紙かけこう

やうにさらしくと夕日にかくやさらうに、ふんべ
日けうしうちのけりなさなどあれなほう
そへてかたりぬふ
峯の雪汀のうはりふと日けて君にそまど
姫君はまどかず、こゝろの里に馬はあれどなど、あや
しきとゞりめし出て、もちらひし給
ふりうぶれうぶは、こゝろ雪よりもなかぞら
まてぞ我はけぬべき、とうきけちさり、此中覚を
とがめ給、げにくくもうきて げかれと、たづし
くてひきやすけ、さらでだにうるひあり世を
いよくあれはいうじと、人の心にしめられんと、

ひらしぬふ云のもかしきいたんかたなし。此句もの
いこ二日とこぞらりうまへれば。うろのどうなすなか
まくまかたこゝは哀(あはれ)とのこゝかくおぼしまさなか
ゐをはよろづはれいのひまぎらりして。此ぞか
どこてまつりたり。(浮)ふはこゞれたりかこすうしかげ
らきて。こゝちぬは紅梅(こうばい)のどりおもど。おりひかし
くさうへてぬまへり。侍従もあやしきさしぐらきたり
しを。おぎやぎられば。その身後とりなて。(浮)恵はきを
なて。此てうづまいらを給。姫宮(女一宮)はこれ(浮と)をとてまつり
こらば。いとじきものはしき給てんし。いとやんごと
なきくもの人(女さん)おぼれど。うぞらりのき風しきたりは

うたくやとこゝ給。うたゝはなるまで楚びさはかれいと
ゝらし給。志のびてゐてうくしてんとゝ給。楚
のなふ。そのほどかれ人まえしたらばと。いらじき
ことぞせちうたをなへば。いとゆりなきとくせて。
いとへもやらず。潤さへおつる氣色。交まめれまへま
ごまおもひうつしぬなめりと。むすいたうおぼさる。
恨てもなきてもよろづの給あして。與ふくゐて
かへり給。例のいざきなふ。いとうじくおぼすめる人も
かうはよもあらじよ。こゝしり給ふりやとのたまへば。
げまとせひてうなづきてゐたる。いとらうたげ
なり。谷をつまぎもなちていれたてまつる。やがて是

より別て出給ものあらずいとゞとおぼさるかやうの
久さは粗二年院までおもします。いとあやましう
しまて。まれなどもこしてきこしめさず。目なんて
あれこやき給れなしきかたる代。うちまもいづく
まもおもほしなげくまいとゞまれさもがしくて。
此文ごとまゝ海かまいえうき給もず。うしこまも。かれ
ありしさめれと。姫のまうむ所に出たりける。かへり
きまかれば。心やすくもえこず。うくあやしきすまね
とこゝかれ。其の事をなし給ひんさ海をゆかしくま
のしまて。母君もしるべきあらうまし。志のびたるさ海
なりしも。ちかくはたしてんこと代おぼしなりま

それがいとめやすくうれしうるべきことなりせて
やうく人もとめ。けうもけめやすさなどむ人て
（字法へ）とうきぬふ。紙（浮ふ）ころまもそれこそいあるべきことは
もじめより約ひそれとは也なるべ。あるがちなる
人（句）のれことをせひ出るに。恨（うら）を給しさ後。の給し
ことぞ。面（おも）かげよつとそひて。いさくかまどろめぞ。夢（ゆめ）は
こゝ給つ。いとうこそあるまでおぼゆ。あれんかり
やまで。日ばおぼくなるに。いとゞ（句ふ）山ぢおぼしこそ。
けりなくおぼされそれがおやのうこは所をきゝ物は
こそとおぼすもかくじけなし。つきをぬことぐも
おきのまそ

句
なぶめやかそなるの雲もこゝぬまで[illegible]さん
くるしころのまびしさ。筆にまかせてかきこゝぐり
ゆくるしもこゝ前あり。おかしげなり。[illegible]ことゝりいと
とまくなどはあらぬ。つゝき心ちに。いとかゝる心を
せひも夜さりぬべ。かれど。そじめかりちぎり給し
さ夜も。さすがにかれは[illegible]ひとがらのめで
たきなども。世中とさりにしつゞめなれば。にや。かゝる
よきことを。つけて。せうせこ給なん世には。いつでか
あらんいけしかとせひまどふ。おやにもせいずに。
こゝろづきなしとこそはまてつゞらもれめ。[illegible]
心ゆかしぬふ人をこゝ。おぼなるれ心のなぶとのこ

きくしかば、かゝる程こそあらめ、まことかうなぐしくも
京にかくしすへさまひ、なぐらへてもおぼしかず
まへんにつけていかれうへ(中)のおぼさんこと、よろづ
かれなき世なりかれば、あやしかりしタぐれの
しるべどりにぶにかう(ふね)君出給めり、まして我(ほが)あり
さ間のさもかくもあらんとさく給もめやうはあり
なんやとせひこどるに、我心もこさずありて、坂人(かれ)(慧)に
うとまれこそまつらん、なる紙いとじかるべしとせひ
こぶるくありしも、かれ(慧)殿よりれ使(つひ)あり、これかれと
こゝろもいとうこそあれば、なる紙(白ノ文)ことおぼかりける紙
こつくかしぬへれば、侍(ぢぐう)右(うこん)をこあもきて、なる紙

うつりにかりなと、いもぬやうまていふ、とかりぞ
し、夏の(薫)れ(侍従詞)かたちを、夏ぐひおりしまさじとこし
かど、これ(白ノ)れ有さ海もいそじかりかるも、うちこぐれ
ぬへるあいりよ、丸(まろ)なるにが、かぞうりのれおもひをこ
ふ、えかくてあらじ、さ法いの文まもまいりて、
つゐにこそまつりてんといふ、右(うこん)をうしろめたの
れ心の(侍従ノ心を云)ほどや、夏(薫)のれありさ海に、まさり給人もこれ
かはあらん、かたちなどはさらず、れこころぞ人けもひ
などに、なほ(白)これれことは、いとこぐるしきわざれ、
いかになるせ給もんとすらんと、ふたりしてかな
ふ心(比)ひとつにおもひしよりは、更ごともこそより

むこさまやり後（芸ノ文）のかゝこまは、（文句）せちながら日比よなるか
こと、時ぐはそれよりも、おどろかい給まんこそ、せふ
さ面なるしめ、とろかるるまやはなぐ、けしがさる
水（芸）まさるさちの星びといかるらんかれぬなが
めまかさくらすとろつゆよりも、せひやりさしゆる
こと面さりてなんと、しろさしさしまてさてぶこ
なり、かてもこ面なるおしげなるれど、うさぎ面
ゆへくしくこゆ、（句）変はいと（文句ノ文）おほかるをちいさく
むすびなしめる、さ面ぐおかし、まげかれを人
こぬほどまとこさも、（浮句）かゝるえさも、まじと、
もぢらひて、もなるらひる

（浮白一ノ五）
星の名紙ハ月よりれバやましろ此うぢの
ひたりぞいとゞすゝうさ。（白）宴のうさゐへりし恵紙。
（浮ん）時ごゝてあるれかりあるがゝへてあるまじゝさゝと
ぞとゝどさ海うぢ海にさひあきど。浮うまゝこ
もりてやゝあるんまいと哀におぼゆべし
（浮白一の五）
うきくらしとられをぬ（三ね）峯のあま雲（ぐも）にうきて
世をふる身ともあるさがや。まじりまながと思たるに。
（白ん）ゑやいかくとあるれぬふさりとも忘しゆゝさふ
らんしと忘しやるも。（浮ノ）もれさひてゐたんさ海
のゝおもげにゝしぬふ。（蓋ん）まれんべきのどうに見給
ひ。哀いうにあるが世にんとさひやりて。いと忘し

つれぐと所をしる事のなやまるゝにそでさへ
いとゞこゝろ風さりて、とある紙、うちもなりずゑ
まふ、女家に物語などしてゐてのついでにおあし
ともやおぼさんとつまし、なぐらさすがにさしへ
ぬる人の侍る紙、おやしき所にすてをきて、いとゞ
く物しふるるが心ぐるしさに、ちうしよびよせてと
しゐる、むかしよりことやうなる心ぐへ侍し身にて
世中をすべて例のひとなんでこすぐしてんと
しゐしをかくこゝろてまつるにつけて、ひとふるにも
すてがたれがありと人にもしらをざりし、人の
うへさへ心ぐるしうつゝえぬべきこゝちしてなど。

きゝし人だ。いかなるにも心よく地ともしらぬ（女二行）
とゝいふ人絵。うちまちなど。おしだ海にこゝしめさ（慧行）
すりひとや絵しんと。世の人の地ひぞ。ひとはづさ
あくらしうゝず絵ゝや。されどもれいさゞりの
うずまづま絵りまじわど。あしのふ。ひくりしう（慧ん）
取（ほと）きつしてんとおびしらなりかれちなり
なりあど。葉（ちぢ）やうまいひちすへやおかんあどくなし
それば。ひと無そさうじわしすべこゝしあど。へしも
こそあれ。これ内記（ないき）（内記が妻ノおやと云んこ）がまうし人のおや。大蔵（おほくら）の大吏（ふゆふ）なるか
あれはむつましく心やすきまゝの絵つけしり
それば。きゝつぶそ。ひや（自）まはくれなくこゝてそう。

絵師どもなども。れ 須月（ずいぜん）どもの中にあり。むつ
ましきとのびとなど紙をうて。さすがにつぎとなん
ささせ給とやすに。いとゞ（旬ん）おぼしさもさぎて。つがれ
めれとの。と紙をずらうのめまてくぶる家。下つる
にある紙。いとものびたる人をぞしかくいたんと。
かたらひ給かれば。いかなる（ずいぜん）人にかはとおもへど。だ
ぶとおぼしたるに。かたじけなきれば。さらばと
をうしかり。これを（旬ん）まうけまて。すこしれうろのどめ
ぬふ。これ（三月ヘ）月のつごもりがたにくぶるべかれば。やが
てそれ日つるさんとおぼしかまふ。かくなんと
もふ。ゆめくといひやるに給つ。おいしまさんことハ

いとつりなくあるうぢまもろまも（系を云之）めれといとさう
しかれどうるうるべきよしをきこ（志を）也。大将殿（慧）は
卯月の十日となんさぶめぬへりける。さそふ（浮ん）あり
あらばとはさもぞ。いとあやしくいかまさるすべき
男まかあらんとうきたるうちのみすれば。母乃れ
もとまさばしつらりて。さめぐらすほどあらんと
おぼさど。（常陸舞）かねのめ子うむべき程ちくなりぬとて。
ぞ法（おう）ど程（きやう）などひまなくさもげば。石山まもえ出こ
つまじ。（浮母）わらぞこちつらりぬへる。めれと出きて。殿（めれと同慧）よ
里人ぞのさうぞくなども。こ夜かま苦しやりてなん。
いかでこさらげまなるまどともさ出なれど。まくがうろ

ひとつにはおやしくのこそ志出侍らんかしなど
いひさもぐが心ちよげなるを浮ノ三ゐふにも浮ん こさみハ
そしうらぬことぐもれ出さて ひとつにへなるしば
これもくいるさもん おやまくにの給人白もる
やへさつ山にこもるをかなしずこづ口て我も人も
いさづらになりぬべし なほ心やすくかくれなん
ことをせへと そふものゐへなをいかにをんと心ち
あしくてふしゐへり母訶などかかくれいなるず いとく
おなじやをゐへるとおどろき給 日比めれと訶おやさくのミ
なん もうなきもれもさうしめさず おやましげに
をさせぬふといへば母訶おやしきことれ拍のけなど

まやあらんといふ（懐姙ノとき）ある此こうちぞとせんぞ石山も
とまり給ふこさうしといふも（浮ん）ゐるさちらいるそれぞ
かしめなり・くれていと月あり・宿明の光を
せひ出る・泪のいとゞめぐるこさは・いとかしかしぬ
心かれとおもふ・母ぞ君むかし物語などしておるるの
（弁ノ）あまぞ君よびいでゝ・（弁詞）こひめ（大）ぞ君のれあるさ海・こころ
かくおりして・さるべきことも・おぼしいれたりし
程ゑめるこすくきていり給ふしことなどかたる・
（大ノ）おりしまさ海しかば・宮のうへ（中）などのやうに・さて
かよひぬて・こころぼそかりし此有さ海どもれいと
こゝろまされさいそいまぞ侍らましかしとかゝるも・

我娘(母ん)いと人々はおもふやうなるすくせれおもし
とてぶをうらじをなどもひけじかて世(詞)こゝもな
これ君(浮)まつけていもれをのこゝもこゝぶれしやしこの
すこしうちゆるびてかくてはうち給ぬべか然れど
こゝまいりくること。かるしずしもことさらにはは
えゝもこゝち侍らじかゝるこいめんのおりくりむ
かしのこともこゝろのどうまさてしうけゝ雨ぞら
まほしかれどもなどかくこゝふ(弁詞)ゆくしきまとのこゝも
ゆへしこゝましかば二雨やかまこゝえてまいり
事しさきんも何かもとつまりてすぐし給つるを
うちすてくはうらせ給なば いとこゝろぼそくなん

ゆべかれど、うろれすまねも、こころもとなくのこく
こそまつりをうれしくも、ゆべかめりかれ、よるまたら
ぜ、をもくしく、おもしますべかめる、茂(蓋)もんれ
ありさ夜にてかく、弱きてさを給しも、おぼろけ
なるじとさてをき、ゆまし、うきてうことにやハ
ゆるなどいふ、後(毋詞)ハ、しらもど、こぶいまはかくおぼし
もなれぬさ夜にの給につけても、こぐれしるべを
なんとむ写ゆる、宮のうへ(中)のるさぶけなく、おもれに
おぼしたりしもつくましきことなどのをのづから
ゆしうばなるぞにところをきれ、力なりと、しるげき
ゆてといふ、尾(おま)だ、おけりひて、此宮(弁詞白)のいとさいがしき

まで色(いろ)はおりしますなれば心ぢをあらんつかさん
きふくひかくげるなん。おほかるはいとめでたさ此
有さ面なれど。さうすぢのことまて。うへ(中)のなめ(浮と)しと
おぼさんなむつりなさと。こいふがむすめれうり
仰しといふまも。さりや(浮ん)。ましてと君は字ふしまへり。
おれむくつけや。みんぐの此姫(女三)をもちてまつり
たまへ家ひ(芸)となれど。よそくまてあしくもよくも
あらんいうぐちをんとく。おほけなくせしまし侍。
よろしぬことをひき出ゆへらましかば。すべて力
まはりなしくいえじとおもふこゝもとも。まるこゝろて
のつらざら面しなどいひかつすことぐもは。いとぐ(浮ん)

ころぞもくつぶれぬ。なをワガ力をうしなひてゾや。
つねにさくまくさしくハ出さなんと思ひぐらる。
これ水のをとれおそろしげにひゞきてゆくを。
らぬながれもありし。よまくずあらましき所に。
年月をすぐし給を。衰とおぼしぬべきほどに
なんなど。無君志たりがれにいひぬたり。むかしより
此河のもやくおそろしきことをいひてさいつころ
ワラし寺がむまごれワラハさほさしまづ志ておち
入給るけるすべていたづらになる人おほかるなる
給りと。人ごもいひあへり。きこはさても武力ゆく
思も志らずなりなば。これもしくあへなくいうじと。

あだしこそちぎらめ。あだしへていへ〳〵ようこさ
こともあらんいふつゝそれよれものこんとするを
たくみなは。さゝり水もあつまりう。ささやかり
まろげたちきられど。うちくへしいとうす。おやの
よろげならひいすありさ海と。○ころやうまて川く
げくとたひこぶろ。おやまうしげまてやをあへなを。
めれとしまもいのそ。さうべきれ祝ぞるゞをきせあへ。
まうりくへるどもすべきやうなどいふ祝くし
げな。こそぎしき海路しげある袂ぐもちでよろづ
まいのひさぐ。ひとずくあしめりよくさるべくし
あさりとくずつそ。今まうりいとめこまへやむごと

なきれなりしひはさうじこそなまごともおいら
かまおぼさあ。よりしぬ中（女二と浮とる）となりぬかあるもも。
まづらりしきことともありぬべしかくしひそめて
さるこころしぬへなどせひいたしぬことなくいひ
をきて。かしこまりづらひ侍る人もおぼ法なし
とてかへる代。いと（浮ん）抱おもしくよろづこころぼそ
かれがまたあひえてもこそともかくもなれとせへば
心（詞）ちのあしく侍るまもこそまつしぬがいとおぼ
つなくおぼく侍るをせずしもまいりこ後ぼせく
こそとせしふ。さ（丹詞）なんせ侍れどかしこもいと抱さは
がしく侍りこれへどもいるなきことなどえしやる

まじくぞげくなど侍れば、なれ、ふけ、ふれ、こうまうけ
ろひぬるとも、志のびていまいりきなんを、なをく
しき身の程とは、かゝる所にめこそいとおしく
侍れなど、打なきつゝの給。蓋の所にはふもあり。
なや(文行)ましとさてこうしを、いかゞとさふらひ給
へり。こゝづくしと志侍るを、けりなきさいりおほくて
なん。これほどのくらしがこさこそ、中こくるし
などあり。定(句)は唯(文行)日の所へりもなりしを、いかゞ
おぼしさだよふぞ、かぎれなびかんかこもうしろ
めたくなん。いとゞ侍れまさりてなが給ん侍るなど。
これはおほくかきぬへり。毎ふりし日さ所ひこうし

れ仗どもぞ。かふもさたりける。夏の御隨身。かれか
（芝）（ずいじん）
（うち）（内記かなへ道定）
輔り敵まで。時ぐうなをのこなれば。まうとはなま
（隨力詞）
しまこそはさびくまいるぞとこふ。まこくし
（白俊詞）
まとふくふべき人のもとに。まうでくるなりといふ。
（隨力詞）
ひさくしの人まや。えんなるふこもさしとらす。
かしきあるまうとかれ。もれがくしはなぞといふ
（白俊詞）
雨とくはけうの云の御文。如所（ねうばう）りさてまいり
（知雲撰ち時芳）
あふといへば。ことさがひつてあやしとせんぞ。こ
（隨力ん）
まてさぶめいちんも。ことやうなるべかれば。をの
とのまいりぬ

蓋ノ紙 佐方
うやくしきもれまて。ともるあつ見らさ紙。
佐方詞
これをのうるさりげるくて先いけよ。左衛門尉
さいふの家にやいなとこうをれば。白 こうやにまいり
て。こうハ詞 或子のお捕(せう)になんれ文ハさらせさべり法つと
いふ。地 さまでこゞゐんもれとも。ともりの下すハしかず。
白ノ紙
こくの心をもふうしらざりなれば。ともりの人にこ
あらハされにけんぞくちおしきや。佐方 夏にまいりて。
蓋ノ
前出給りんとするほどに。れ文にてまつらす。蓋 ち紙
しまて六条院に。こさ法ハ 右の家出させ給へるころなれば。
まいり給なりなり。こゝくしくれ前なども何まる
もなし。れふこまつらする人なり。佐方詞 あやしきことの

侍つ。こゝぬへさぶめんとて。今までさゝひつゝと
いふ代。ほ(蓋ノ)のきてゐてあゆこむ給まゝに。なまごとぞと
とひ給。これ(ほうかん)人のさうんもけしましとさてかし
こまりてとう。飯(蓋ん)もしらこまりゐて出ぬ。宮(ぬ石中ゟ)れ升
ならずなやましげにおりすとて。宮さちもこれ乗り
ゐつり。上遅アなどおほくまいりつどひて。さはがし
かれどことなることもおりしまさず。坡(れ)内紀(ないき)も政官(じやうぐん)
なれバとくわてぞ乗れる。此(浮ノ文)ゆゑこもとてまつる
を。宮(白)だいん所におりしまして。ぎゞにめしよせて
とり給代。大(蓋)将(ごせん)の前のるゝより出給。そばめにこと
としゐて。さちにもおぼすべかめる文の気色なると

おりしも、立ちどまりのへりひきあけてこのふ
むのうすやうは、御やりまうさるべしところ、
かゝる心つれて、ところもむきなれは、おやども
うちてども御まおもすれば、これおいぎりしらむ
給ひて、おさでいで給とうちきつげさて、おどろかい
さてまうり給、ひきうしあへりまずぞ、おさぐさし
のぞきあへり、おどろきてれひもさし給ひ、奏もつゐた
あそ、まうで給めべし、れいのれじやけのなちく
おこせし御まで、ぞりつゝ鳥、おそろしきけぎなりや、
やまれ、薩まをていまさしよつきしさんといそ
げしまて立あめ、奏かけて立出あめ、おとゞし

こやとさ紀にとてなりゐて、おまるの出子どもれ、
上ぜ遣ア君ぐち引つぐけて、おなるにつくりゐぬ、この
黄ハ愛いをくわて出ゐふ、信力氣色ぢらこつる、あやしと
おぼしかれば、ごぞんなどおりて、次ともすほどり、
ずいぶんやしよす、戸詞ほうことはなまぐるぞとしひ
語、けさかれうぢに出雲のごんのこと、時方の朝臣の
もとに侍るとのこれ、じらさきれうすやうにて、様に
つけたる文をよしのつまぞによりて、女房にしらせ
侍りつる、こゐへつけて、しらくとひ侍つれば、こと
さぐひつ、宅ごとのやうに戸侍つる紙、いかに戸とも
ぞとて、けらりべしてこを侍つれば、白戸へ戻り

まいり侍て或ハ（しきぶのせう）お補こちきぶの郎臣になん。その
ゆらるゝはとゝせ侍けるとゝす。（荒ム）君あやしく覚して
（訶）その返るゝはいかやうにしていぶし侍るぞ。（恒カ口）拙られ
いとゆへずことゝかゝりいぶし侍まけるゝ下べの中
侍つるはあるきしきしのいとゝさよらなりとなん
中侍つるときも（荒ム）おぼしあたするに女がふこと
なし。さまでゝをつくんをかどくしとおぼせど
人ぐちゝかれバくちしくもの給ひずこちすがら給
いとおそろしき。ゝ海なくおかする（白）家なりや。いか
なりけんついでにさるひとありときくこまひかん。
いかでいひより給けん。ゐ中びとゝかあたりにて

やうのすぢのまぎれはえしもあらじとおけ
よそおされぬれ。さてもしらぬあらりまこそ。さら
すきごとをもの給はめ。むかしよりへぞてなくて。
あやしきまでしるべし。おてありきこてまつり
しかましもうしろめたくおぼしよるべしやと
ぬふにいと心づきなし。さいのれ中のれことをい
こじくしつ。さしごろすぐ源は。ワがうろのをも
さはこまなりなり。さるはそれをいまもじめて。
さ海あしうるべきほどまもあらず。もとよりも出
たよりにもよれるを。こゝ心のうちの人海あらんを
ワがこゝあも人のこゝあくるしうるべきまより。ひもとゞるも

をこなるわざなりけれ。此(句ノ)ばかくなやましく志ぬて。
例よりも人志げきまぎれに。いつでいかぐとうき
やつと給つらん。おりしやそめにけれ。いとしろうなる
けさうのこちなりや。おやしらて。おりし(句ノ)前こづ。
られぬふ日もありと思ひしさし。さやうのことに
おぼしこぎれて。そこしらとなくなやこ給なるべし。
むりしをおぼし出るにも。えおうをざりしほどれ
なげきはいとくおしげなりきしと。いくぐと
おもふに。女(俗)のいうく抱おもひうさ後なり志もかる
りし心えそめぬてはよろげおぼしあはするにいと
うしまうがこき抱は人の心にもあるかれ。らうさげに

おほとうなりとはこしなどしいろめきたるかたは
そひたる人ぞうしこれ句こやのれくまてはいとよき
（浮と句と一具とく）
おもひなりとおもひもゆづりのべくのく心ちし
まへどやむごとなくしそめし人ならばこそおしめ
な紙さうもれまてをきたらんいまはとてこぎらん
もて遠しうるべしと人はろく色く心のうちは
おぼしくつれすさ雨じくしなりてすてをきたらば
うるしずれ文よびとり給てん人のため後のいと
おしさをもことまたどり給まじさやうしりおぼす
人こそ一品の文のれうたる二三人まいら給たな
（浮ノ句ノ方へ）
れさて出たちたらんをこきらん いとおしくなど

るをすてゝくるしきこゝろはしりて。れうあつけり
所司の随身めして。御前つゝへまゐらせ
ふりくちぐちの饗庭は。ちゝのぶが家のやうなり。
きらんゆゝしとや院。ちへいつるや。これありけん
そのこいやうらん。らすりもてなし人あれば。道定か
おもひかくしとりちゝしめさめて。ひとり
ふるでとまうれど。ありとり。この給ひこまりて。
きうがつる。これ發の所よりおかつりしける
よめしもしかまかすれど。枕ありてえもまず。遂ともし
ふすまなくしはましくつしとあはちば。とくとも
給ふ波。ゆくりたゞ御使の御もりきけきよつけても

本ならでさへ晦ぐかりけるぞの結へる
あすこにゆかりとおもはず来の私まつらんと
のこさひけるれ。人こゝろは結かとおかれを。いと
おやしさやすまむすめもやるぐりぬれば逢ふすをと心
えゞゆまこさくんも。らいまぐしくひがこと
まそあゝんもあやしかれば。けれあとにもとのやう
まうして。添ふべのやうまこと絶れぶるん。おやもく
あすやましくそおかまごくましりこさへてそてまう
まこ川ごあてさますべまいくくもおもふかられ。かけて
こさまぐらめ心ぐへよく。ゆし恋すられ給もことしとハ
えあぼしさそあちあり。まほなまをどはのあし

ゆへうかしこまをうしこまはいとゞしひそふ。つゐま
秋月はかしかしず。おやしくなりぬべきなりと
いとゞしふとこゝろ。なをこさて。とのくれふこゝ。お
どて西しこてまつしをゆへうぞ。ゆゑしくいと
侍るなる物をといへば。ひがことのあるやうまこゝ
つれは。あるがへかさてとの給。おやしとこゝれば。
こちまてあけてこけるなり。よろしずのうこんが
さ夜やなこ門とはいとであないとおし。くるしさ
ゆるすぞまこそ侍れ。夜は物の氣色ゆゑんじとる
べしといふ。おもてざとあるこて物もの給もず
文こゝろんといふもの。ことざ夜まてかれゆしこさ

ころ人のかたつまとそたとおもふに。これか
さいふぞなどもとひ給ひず。これ人どのこゝせふん
ともいうじくもづし。我ころもてをそめしこと
なし。ども心うさすくきられと。せいりてねたるに。
侍従とふたりして。右色（うえ詞）がある。のひたちまて（常陸国にたしるをさせ）。ひと
ふたりこ侍しと。ほどくにつけてし。たゞくぞ
うしこれもかれもをさしぬころざしまて。おもひ
まどひて侍しほどに。女は今のうたにい面すうし心
よきまさりてぞ侍けるそれにつたこそ。つねり
いまれをばこゝろしてしぞうし。さて我もすこ侍
らずなりまさ。国（くま）にもいうじ。さあたらつはもれ独（ひとう）

うしなひ川まさしあやまちたるもよさらうどう
なれどかうあやまちしたるものをいかでか
つゝまんとて國のうちをもとひたるゝれぬすべて
女のたいぐしたるぞとて鉢ちのうちにもなしい
かくらざりしかば あづまの人になりて ほんのみと まくも
いはに恵なるさ侍りはつゝみかくしてこれゆくし
きついでのやうに侍れど上も下もかうすぢ乃
ことはおぼしえざるくことはいとあしきわざなり
此命(いのち)までにはあしずとも人のれほどくにつけて
侍りしなり しぬるにまさるたぢなることもよさ
人の身にはなりく侍なり一ゑにおぼしえざ

めてよ。実も此こころざし面さりてまめやかり
ざる罪しさせ給いぐ。そなるぞ面にもなびうきなて。
もれかいうくなげせ給そ。やをおとろへさせ給も
いとやくなし。さぐらりう(浮)へのおもひいるづさ罪し
さき給物を。まらがこれ此いそぎにころをいれて。
まどひなて侍るつけても。それよりなるまと罪し
さきのふ此るなこそ。いとぐくりしくいとおし
かれといふに。いまひとりうしておそろしさまで
なる罪しさき給そ。なるにぞも此すくさまてこそあらめ。
こぐ此心のうちに。すうしおぼしなびかんかるを。
さるべきなるおぼしなしきのへ。いでや(白うす)いとかうじけ

なく、いうじき此乳色なりしかは、人のうくなげし
いそぐめりしかるにも、此心もよろず、さぐしまうく
ろへても、心のまさらせ給ひんによらせぬひ○とぞ、
さひえ給ふと、[白]家をいうじくめでこさゆうころ
なれば、ひるこうちにいふ、[右を訂]いきや右をはとてもうく
てもことなくすぐさせぬへと、ちつを石山などに
乳[ぶん]をなんとて給ふ、これ[芸]大和愛の[ミ]此さうの人ごと
いふものは、いうじこさぶらうのものどもまて、ひとりい
此里にこちて給ふなり、大かた、これ山さろやまとに、
愛の乳[ヨウ]じ給所々の人なん、これこれうど称りといふ
ものゝゆりかけつて給ふなり、それがむこの、右を[うこん]の

大夫といふものを、もとしてよろづのことに
をさてあはせられたるなり。よさひとれはなり
どちハ情(なさけ)なきことしたるよとあはさずとも、ものく心
えぬね中人どもの数ね人にてかたりぐさふる
へば、をのがぞんにあたりていさくかなることもあ
らきじなど、あやまちもし侍るん。ありしよれ
はありこれはいとこそひくつけく思ゆへられしが
家(白)ハもりなくつくませぬとてはともの人もあつて
おりしまさずやつれてのこおりしますを、さうもれ
こうけこそまつりたらんハいというじくなんと
いひけじくろ後、忘(ほん)なるを我を家(白)にうろよをなり

ころとして。此人ぐのいふいとゝづしく。こゝら
まはいづれともせもず。こゝ夢のやうにあ。されて
いとじくいられ。夜ばなどかくしまとづりせんど。
これこゝさとして。年ごろにまゐりぬる人を。今はとも
てもなれんとせもぬまよりこそ。かくいとじとまれ
もせこゞるれ。げによりしぬことも出こゝろん時と。
つゝぐとせねこり。我もいかでせれバや。よげ。ノ涙
こゝろうりけり身かれ。かくうきことあるこゝろしハ。
下せなどの中まゞにも。おほくやハあるとて。うつ
ぶしぬしぬへバ。かく（左手付）なおぼしめしそ。やすらかる
ゝるをとてこそこさしきを。ぬれ。覚しぬべき

ことをも。さらぬがほのこのどうにこしさせ給人
かを。これはことの後。いとじく心いられをさせ
ぬ人がいとあやしくなんとこそまつるとも心をり
こうかざりは。これかくふこぶれさもぐにぬれと
をのが心をやるて。もれそめいとなるねこり。いま
まりつらはなどのあやすさをよびとりつく。かうる
ひとはしんぜよ。あやしくてのこふさせ。ぬへるも。
もれけるどのさまるげ。アルさをんとするにこそ
とるげく。菱(芝)よりはかれありしまるをぐるの給は
で日ばへぬ。けをどしくうどもりといふもれぞさこる
けよいとあらくしく。ふつくかるるさ面しこる

おされのこゝろれ。さすがにそしさあり。女房(うくはだ)にものさり申さんといふをこれば。右をしもあひこり。
(芝うらわか詞)
殿にめし給しかば。けさとまり給て。こゝどもなんまりかへり給つる。雑事(さうじ)どもあほきこれつゝついでに。
かくておいしまゝほどる。衣布(ふかう)あらけきのことよも。なるがしらかくてさつしふとあほきて殿ゐ
べ。ひぎとさしてまつしを給こともなさをばこゝろ
さうしめきば。女房のれもとる。さしあ所の人かふ
ふやうなんこさうしめすことあるかこいぐ
しさことなり。殿ゐこさふしふ祀どもいそれあるい
こさくこしん。さしでいいかゞさふしふ。殿ゐさ

さぐさせぬへるまうけた風もしぬことなれば
がいこれやまひともく侍りて、無ねつうまつ
ことは、月ごろとうたりて侍れば、おなじもえたり
侍しぶざうべきをのこどもは、けぶいなくまほし
さふらはを侍る紙、されどとさ、ひ（机常）しやうのことのさ
かしたんをばいりでかうけた風もしぬやうも侍
らんとなん申させ侍つかようしてさふらへびせ
なさことをあらばともくかんぶうきし先給べさ
よしなん、御得きごと侍つれば、いかなる御得せごかく
まうと、をそれ申侍しいふを、さくてりふくろふの
なんよりもいとものおそろしいふへもやしで（詞）さり

や。さてしまましまさがらぬことじまをさしめせ。
ものくらしさゆらんじたるなり。ゆきうそこも
侍らぬまなどなげく。めれとは目のうちさして。いと
うれしく侍られたり。ぬすべ。おほかたまりつたるまま。
無ねべもりじめれやうまもあらず。これ力のかりぞ
ぞといひつ。おやしさがそをのこまいらすれば。
夜叶(ヤぎやう)をぶまをぬまとよろこぶ。君(ぎん)はげまたぶいま
いとあしくなりぬべさこなりとおぼすまこや
よりはいかまくとこけのこぶるくつりなきをの給。
いとつづらしくなん。とてもかくてもひと
るくまつけて。いとうたてあることはむさるし。

我身ひとつのなくなりなんのこゝそめやすらしめ
大和物語生田ノ川ノ事ニ
芳ハけさうずる人のありさ海のいづれとなきまさ
ひづらひてゞまこそこゝをこゝろづくしも有れ
なぐ人バなるぞうきとこゝろべき身のなく
なるんハなるかしうるべき おやもしどしこそ
なげき給ふめ おまるのまどもあけかひり 其乃
づらひとれ 其つゝそん ありなぐらもてそこなひ
人ひ人なるさ海まてさすし人んハまさる抱せひ
なるべしなどせひなる 比 こめさ 御とるまゝ代く
とこゝ也れど けるかう世の有さ海をもちるゝすく
なるて おかしこそなる人ましあれバずらしとぞ

なべきこと紙、せうる此けんしむつしき用ぐ（浮）（反古）
などやりて、おどろくしく一さびまもたらくめ消。
さうぶいの中まやさ、あまなげ入さをちど、やうく
うしなふ、うろしらぬごぶちは、拘へ（後道ん）ひろりなしぶ
されば、つれぐなる月日をへて、ひなく志あり先
なへるてなしひなどを、やり給なありとおもふ、紡績
などぞこれくる時し、おどろくはきさせ給、衰なる此
中は此心とぐめてうきかりしなへ分文は、人下
こそこをさせ給はざらめ、拘のそこなをうをなて
ひらんずるなん、ほどくにつけてはいとあられは
ゆるさぐらりめでうきれうこづひ、かうじけなき

此云の葉をつくさせ給へる後、かくのみやうせ給
ちきけなきことといふ。なまかむつしく。なぐ
まじこさ男まこそあめれ。おちらぐまりて。人（白）ちれ
ゝあもいとおしかんん。さうしらまこれをとりをさ
けんこなど。もりこさ給へんこそもづしかれなど
の給。心ぼそ（浮ん）こさこと後也もてもりまハ。まぐえ也ゝ
まじこさけぎなりかり。おやをくこさてなくなる人も。
いとつゝふくなるもれをなど。さすがまほのさて
ゝうことをもしふ。廿日（三月）あまりまもなりぬ。坡家（かれいへ）あり（受訟）
じ。廿八日まくぶるべし。（白）うやも。その（又ノ付）事かなしず
むかへん。志も人などまよくかしきこゝ也まじこさ心

づかひしのへこゝろるさ海よりハ夢まもこさてあり
まじう。こゞひ語なくどの語。さて（浮ん）あるまじこさき海
まで。おりしうらんよ。い海一変（しび）物をも見ず。おぼつ
かなくてゆしならんことよ。又時の海までもいかで
こゝにはよをならんとする。かひなく倶（うこ）てかへり給
らんさ海などをやるよ。例のおもけなるれず。こて
ずかなしくて。此此文をかほまをしあてく。志だらしい
つゝめぞ。いというじくなるさ語。右をあ（左を詞浮）ゑ。かゝる此気色
つゐに人ゑそまつり何べし。やうくあやしなど
ぬひと侍べあり。かうかくづらひおもほさで。さるへさ
さ海に見しさせぬてよ。右を侍らバ。おほけなるさ

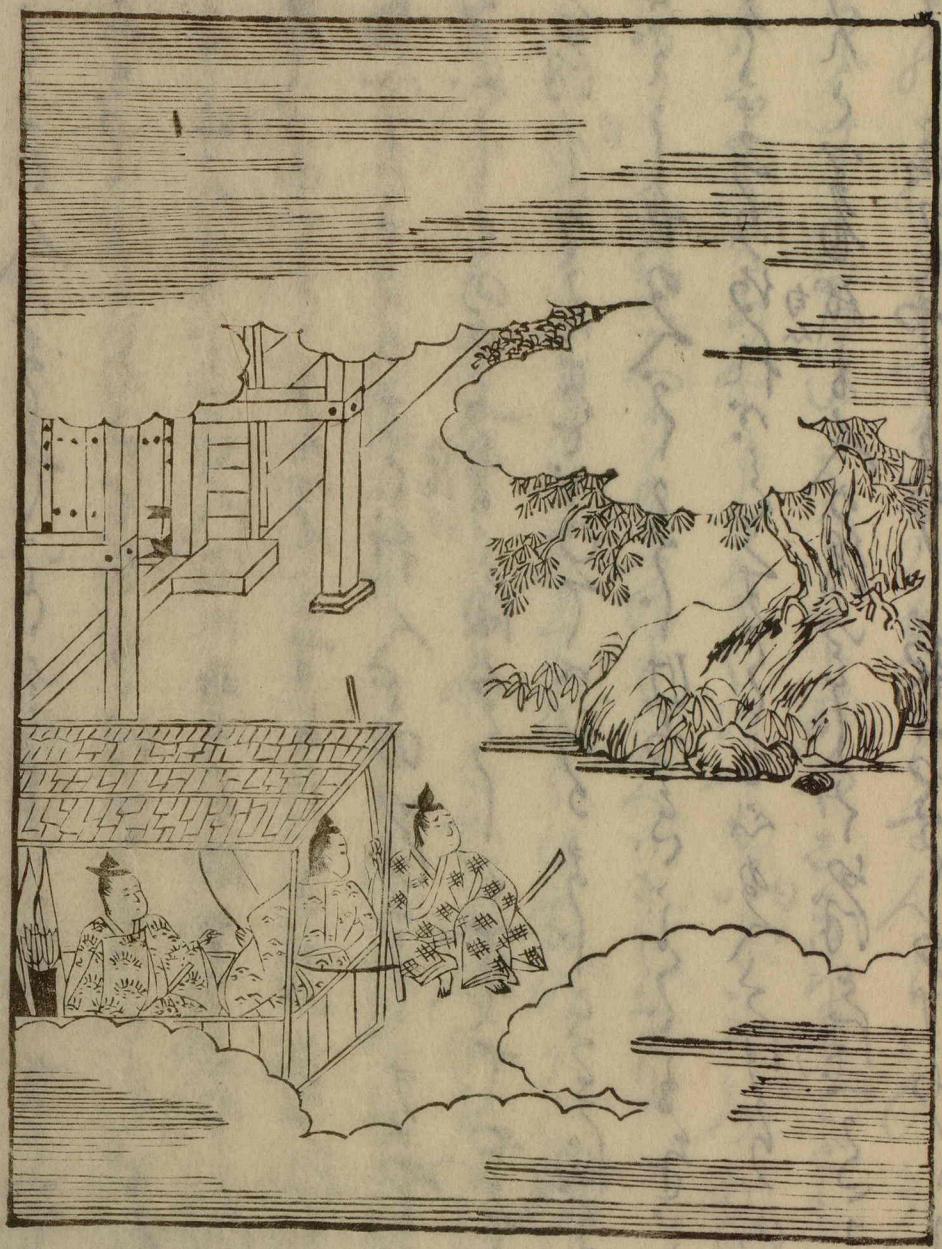
こゝろも。こゝろハかなしむ。かなしかりちいさゝ
れ事ひとつハ。定まりもなくてまつ世給なんと
いふ。とゞ(浮)まりこめしとひて。く(羽)のことはなそいとこゝろ
うかれ。さりぬべきこともふ。うけばこそおもひ免。おも事
まじきことゝもうれしとおもふにけりなりくのこゝ
のことのやうまのすべでいかなることよしき。出給も
むとすかまちるど。おもふまつけて。事のいとこ
ろうきなりとて。ゐすりも思へぬ見するらめ。泊(白心)や
くのことある伝うけひくそしこともなくて。ゐすさへ
さしぐまるかハ。み人(甚)のあるべきこと海まいひさしつめて。
すこし心やすかるべきことゝもまださひさしまりぬかなめり。

ふしつりとく荒浪袖かゝりくと口おしくはてゝさりけれ
我らが衣とかゝりし袖をぞひろぬとぞつしはへぐ為
いひもすつるはかなかる事かな・あすの後より
うちもつてぞ・むかしこそよそにぬる心ちしのべ・御（白）
のこりをしくおぼしめして・おもひまはぬげにげにさの
うきところは・御なつかず・われにこそといふ声ぞいさ
とげなかりし・（白）ものまて心もりのそのこといはれば
されば（女の人）女人とふかゝしくのけしひまず・けうげんも（あなこんい）
しかるに・京よりきのれやこおもちかといふ・衣どが
ずさの名をともびてあひみうけといひつゝくいや
ごあぼゆ・（太子詞）さしはこまひいかのくあらけいかゞしくる

ぢけなさとしいちをしり。宴（白心）などくもてもなり
らんとおぼすは。つりなくて。まげ（詞）時方（出雲拾守）いりて。侍従
まあひて。さるべきさ夜まゐぢられとてつかはせ。
（時方）ぢゞくしさひとまて。どくいひかまへて。君てあひ
しり。いかなりまかあらん。皮（芸）の代給はすることあるも
とて。夜ねまある掛だの。さしがりぶちしろころまて。
いとつりなさなり。おまへ（浮）まも掛をのこいらしく覚
しこあるハ。うるはことのうらじけなさを覚しらぶ
なくまこそはと。心ぐるしくなんこそまつるさしる
こよひハ人々しさこ侍なが。中くまいとあしかりなん。
やがてさも此心づかひをさせ。まべからんよ。こゝまも人

しれずしりまへてなんなりしさすべかめる。それとれ
いさとさことなどもかたる。こいふおりしまゐこち（時方詞）
のあげろけなしず。あるがちなれはしきよ。あや
なくさうしさをんことなん。こいぐしこさ。こゝばい
ざぬへどもよくりしくさてこをうまへといざ
なふ。いとけりなるんといひしろふほどよ。あるも（行後詞）
いてく文り。（けゆく）（句）宴ハれ馬にてすうしとをく立ぬへるよ。
星びたる犬（いぬ）の出さてのゝしるも。いとおそろしく。
人ずくなるいとあやしされありこさなれバ。すぐろ
なるん物のもしるを出さたるんもいかさ夜てりと。
さふしふ限（ぎり）心をぞまどりしける。なほとくまゐり（時方詞）

なんといひさはがして。これ行法をゐてまいる。かみ
けきよりかうして。やうぶいゆとおしき人なり。
馬にのきんとすれど。さらにきゐ。ばきぬのすそを
とりて。立そひてり。けぐけをとりきて。こづらへ
ともなる人のあやしき袖をひさくり。まいりてく
なんとさしぬれば。かくらひ。ゆべきやうぶるなけ
れば。やまぶけのかきの。をどろむぐらのげり。
あふりといふ袖をしきて。おろしてまいる。我れ
ゆちまも。あやしきありさ夜かれ。かくなこちり
そこなられて。けぐしくいえあるまじき身
なめりと。思しつゞくるまゐ。なきなきことなぐりなし



心(俗語)よりさ人はましていとゆうじくなりしとうそ
まつりゆうじきあるをなまく川くりくりとも。とろ
うまうまつまじき人のはありさ海なり。(旬)ふあしひ
ゆて。(詞)ふぐ一こと見えまうしさすまじきが。いかなれば。
い海さしまうぞと。行人ぞのいひなしうるやう
あるべしとのゆふ。(俗語詞)ありさ海くらしく見して。やがて
さゆぼしゆさん日をかゐていちうまじきさ海に。
ふぐうしせゆへ。くうじけなきことぞもを。こ
そまつり侍れば。こをすてしも心ゆへうばかり侍
らんと見る。(白心)我も人の我ゆうじくゆぼきば。一うさに
うしを始いんやうもなし。我はゆうくかけゆくに。

これもれとがめする犬(いぬ)の声(こゑ)たらず。人ごとひさけ
などするは。ちひさなるしおやしさをのこどもの
声にて。犬あやうじなどいふも。いと(白ノ)ころあは
たしかれば。かへりぬるほど。いへがさしなり
いづくよう男をがすてんと白雲のかゝらぬ山
もなくぞゆく。さしだしやとて。此人(僧)をかへし
ぬ。此(白ノ)りしさな面めしく。おもれは。東なりき
霧はしめりたる。此かれかうがしさまぐ。ぬとへん
たなし。なくぐぞかへりさたる。犬をもいひさり
つるうしいひぬたるは。さみ(浮)はいよくおもひこぶる
ことおほくて。ふしぬつるは。いり(僧)さて。おりつるさ面

うるまいしへもをほど。桃のやうくうさぬるかを。
何はいかまうるしんとつまし。けとめてもおや
しかんまことをせへば。むごうまつしうり。もれられ
げまおびちどして。望よむ。おやまささぶちるん。
けこうしちひゆへとのこおりふ。おしゑをとり
おてこて。かさ給してつさ。かのまほひちどの。
むかひ罪ごくんやうまおぼゆれば。よへ一ことを
ぶまこさてしずちりしは。ち後い夜ひとへまさりて
いしじとせふ。其心のどうちるかさ夜まてこんとゆ
くすゑとをうるべさこと後のあひけうひとも。
いうぶおぼさんといとおしう。ふささ夜まいひちす

人もあらんこそ。しやまたづらしかれど。こころあさ
くそしうしぶ。人口人なんをきかれこそまの
らんよりまたと。しつゝ。そて
浮なげきまびしをばすのともちまきうけまうき
名ちかさんことをそしへおやもいと。恋しく。例は
こゝろ。しぬちしうしのこゝまくやうなるも。恋しく。
家のうへ中をしきさしやうまもすべて。いまひとこび
ゆしき人おほうひとはこれをのくもれそ。絶
いそぎおまやうやといへど。浮ふこくまもいしぶよると
なれば人まこつけられず。いでゝゆくべきうるをし
ましけつゝねられぬまゝまこうちもあしくこれ

ぶひまゐり。あけてそが。川のうをゑやまけ。
ひ法じのあゆゑよりも程なき心ちす。宮(句)はいえじき
ことぐまをのまへり。いまさしく人やゑんとせんぞ
これ此世ゆるぐるゆふまくまもりゝ浮
浮うしとぐるうき世のちまりまさぐめずもいけ
こをもうと君もうしゑん。とのゑうさていぐしけ。
かれ蓋(蓋)まも。いまものかしさゑをさてまつしまほし
かれど。こゝろぐまうさをさて。もちれぬ此ちう
なれば。ついるこさあまをゑ夜もんこといとうゐ
べし。すべていかるなりけんと。これまもおぼつか
なくてやゑなんとせひ世す。京より此ゑ此ふゑ

まてきたり。(文行)れぬる夜の夢に。いとさはがしき
こゝ給つれば。ず程さゝろぐにまきさせなどし給ふ。
やがてその夢のうち。ねられざりつるけまや。こゝ今
ひろねして給ふゆめに。人のいまといふことなん
こゝ給つれば。おどろきながらこそまいるよくいく
しまをなへ。人ぞなれこゝれす夜ねまて。時ぞこゝち
よこを給人の(女二ノ霊と云ん)れゆかりも。いとおそろしくなやまし
げに抱きさせ給。おりしもゆめれかうなどよろげてり
なんせなかる。まいりこ夜はしきを。(常陸聟)かねのこ(常陸女)の程
いと心もとなげに。ものくけぞちてなやこ給れば。かる
時もさちさることくいうじくいられ給てなん。その

ちしき寺にも此ず經をさせ給へとて、まれ（ぞ）れうの抱文
あどうきそへてもてきたり。（浮ん）ぞうとせふ命の程を
しらでぐいひつぶけ給へるもいとうなしとおもふ。
寺へ人やりたるほど、（浮）ほしまうく、（文ノ詞）いれまほしきこと
おほかれどつましくてこゝ
（浮）のちはまたあひこんことをしれなんこの世の
夢に心まどもで、ず經の○の風につきてきて
ちるをつくぐとさてかしかへり
（浮）ゝ○のをとのこゆるひぐきに○をそへてつゞ世
つきぬと見るつるへら。（くんじ）巻数もてきたるすがさ
つけて、（母ノ徒）ことひいえかへるまじといへば抱の枝に

ゆひつけてをさつ。かれとあやしく心ぐしつとのす
れ。ゆめもさまうじくとの給ふをうり。爲ゐ人
よくさふしへといはするを。浮ふしと望ふしかへり。
抱（めをと詞）さうしめさぬいとあやし。此ゆづけなどよろづに
いふを。浮ん さうしがるめれど。いとこまくおいなりて。
我なしはいづくにかあらんとせひやすかふも。いと
哀なり。世中にえありさつまじ。ささ夜を。ほ乃
めしていたんなどなばすれば。まづおどろかさ
れて。ささぶろ泪をつゝみて。抱もいられぞ。右を
程ちくふすとてかくのゝ抱をおもほをば。抱せふ
人のうましゐはおくがるなるもれなれば。ゆめも

さはがしきちんうしいづるとおぼしさぐ
まりていかるもくおつしまさちんとうちなけ
くぢ(浮)へうるきぬとかまなしあてくかしゑ
へりとちん

69038
6 AP78